

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 XVIII

鳥取県西伯郡大山町

KURA DANl ARA TA
倉 谷 荒 田 遺 跡
MATU GA WARAKAMI OKU DA
松河原上奥田第3遺跡

2011

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1 調査地周辺の地形(調査後：北東から)



2 調査地周辺の地形(調査後：東から)



1 SI4 出土鉄器



2 SI5 出土鉄器

序

一般国道9号名和淀江道路の改築に伴う発掘調査は、平成12年度から行われ、平成21年度末時点で遺跡数は28遺跡、調査面積は延べ21万平方メートル以上に及んでいます。

この発掘調査は、平成17年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

本書で報告しております倉谷荒田遺跡では、弥生時代から古墳時代の集落跡などを確認しました。この遺跡では、古墳時代前期頃の中国製と考えられるほぼ完全な形の鑄造鉄斧が出土しており、当時の他地域との交流を物語るものといえます。また、松河原上奥田第3遺跡では落とし穴を検出しました。これらの調査成果は、この地域の歴史を解明するための重要な資料となると考えます。

鳥取県埋蔵文化財センターでは、発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。

倉谷荒田遺跡では、現地説明会を開催し、県内外から多くの方々に御参加いただき、その素晴らしさを実感していただきました。

本書は、その調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成23年 3月

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 久保 穰二郎

序 文

一般国道9号は山陰地方を東西に結ぶ主要幹線道路であり、広域交通はもとより、観光交通、生活交通など、多様な交通を担う重要な路線です。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市(鳥取-鳥根県境)までを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡大山町から米子市淀江町にかけての多種多様な交通による交通混雑の緩和、安全・円滑な交通の確保のほか、災害時の緊急輸送路の代替路線としての機能分担などを目的とし、さらに山陰の地方都市間の連携を強化するとともに、環日本海交流の基幹軸の一翼を担う高規格幹線道路(自動車専用道路)として整備を行っています。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成21年度は「西坪上高尾原遺跡」、「西坪下馬駄ヶ峰遺跡」、「小竹上鷹ノ尾遺跡」、「倉谷西中田遺跡」、「倉谷荒田遺跡」、「豊成上神原遺跡」、「豊成上金井谷峰遺跡」、「松河原上奥田第3遺跡」の8遺跡の本調査について、鳥取県埋蔵文化財センターと発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査を行いました。

本書は、上記の「倉谷荒田遺跡」、「松河原上奥田第3遺跡」の調査結果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いです。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成23年 3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所

所長 江角 忠也

例 言

1. 本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成21年度に行った倉谷荒田遺跡、松河原上奥田第3遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。

倉谷荒田遺跡	：西伯郡大山町倉谷字荒田ほか	調査面積：1,450 m ²
松河原上奥田第3遺跡	：西伯郡大山町松河原字上奥田ほか	調査面積：12 m ²
3. 本報告書で示す標高は、国土交通省2級基準点H18-2-4（倉谷荒田遺跡）、国土交通省4級基準点H18-4-12（松河原上奥田第3遺跡）を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。磁北は、座標北に対し、約6°40′西偏する。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
4. 本報告書に掲載した地形図は、大山町作成の「大山町地形図」を使用した。
5. 本報告にあたり、以下の内容を業者委託した。
倉谷荒田遺跡：調査前後航空写真撮影、調査前後地形測量、V層上面の地形測量、出土炭化材の年代測定、出土鉄器保存処理、鉄器CTスキャン撮影
6. 本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は埋蔵文化財センター及び同発掘事業室調査担当が行った。
7. 本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当職員が撮影した。
8. 本報告書の編集は牧本・森本が行った。執筆は調査担当職員が分担して行い、目次に執筆者名を記した。
9. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。
10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、野島 永氏、大山町教育委員会にご指導・御協力いただいた。明記して深謝いたします。

凡 例

1. 遺物の注記における遺跡名には以下の略語を用い、併せて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
 なお、松河原上奥田第3遺跡では、遺物は出土していない。
 倉谷荒田遺跡 ：アラタ
2. 本報告書で用いた遺構・トレンチの略号は以下のとおりである。
 SI：竪穴住居跡 SB：堀立柱建物跡 SK：土坑 P：柱穴・ピット
3. 倉谷荒田遺跡では、本調査における遺構番号（新）は発掘調査時のもの（旧）と変更している。
 新旧の遺構名・番号の対応は本頁に付した遺構名新旧対照表（表1）で示している。
4. 本書における実測図の縮尺については、基本的に以下の縮尺としている。
 遺構図 SI：1/80、SB：1/80、SK：1/40、遺物出土状況：1/40
 遺物実測図 土器：1/4、石器：1/3・2/3・1/5、鉄器：1/2
5. 本書における土層名称は、基本的には『新版 標準土色帖』による。
6. 遺構図・遺物実測図に用いたトーン及び記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
 ■：赤色顔料付着範囲 ■：石器磨り面 S：石器 F：鉄器
7. 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示している。また、遺物実測図中における記号は以下のとおりである。
 →：ケズリの方向（砂粒の動き）
8. 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
9. 本報告書における遺構・遺物の時期決定は下記参考文献を参照した。

参考文献

- 清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社
- 濱田竜彦 2003 「大山北麓地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書－洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査－』鳥取県教育委員会
- 牧本哲雄 1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

表 1 遺構名新旧対照表

新遺構名	旧遺構名
SK 1	SK 4
SK 2	SK 7
SK 3	SK 9

新遺構名	旧遺構名
SK 4	SK 5
SK 5	SK 8
SK 6	SK 6
SK 7	SK10

新遺構名	旧遺構名
SI 3	SI 3
SI 4	SI 4
SI 5	SI 5
SB 1	SB 1

目 次

巻頭図版

序

序文

例言

凡例

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯 (牧本) 1

第2節 調査の経過と方法 (牧本) 2

第3節 調査体制 (牧本・森本) 3

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 (森本) 4

第2節 歴史的環境 (森本) 4

第3章 倉谷荒田遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と層序

1 遺跡の立地 (森本) 8

2 基本層序 (森本) 9

第2節 調査の概要 (森本) 11

第3節 縄文時代の調査

1 概要 (森本) 13

2 土坑 (石原) 13

第4節 弥生時代の調査

1 概要 (森本) 15

2 竪穴住居跡 (森本・石原) 15

第5節 古墳時代の調査

1 概要 (森本) 19

2 竪穴住居跡 (森本・石原) 20

3 掘立柱建物跡 (石原) 25

4 土坑 (石原) 26

5 IV層出土土器 (石原) 28

第6節 古代以降の調査

1 概要 (森本) 28

2 土坑 (石原) 29

第7節 調査地内出土遺物 (石原) 29

第8節 遺物観察表 30

第9節 自然科学分析の成果	
1 はじめに	33
2 分析試料について	33
3 測定方法及び結果	33
第10節 倉谷荒田遺跡の総括	
1 まとめ	(森本) 38
第4章 松河原上奥田第3遺跡の調査	
第1節 基本層序	(牧本) 41
第2節 落とし穴の調査	(牧本) 41
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 名和淀江道路関係遺跡位置図	1	第20図 SI 3 出土遺物(1)	22
第2図 遺跡位置図	4	第21図 SI 3 出土遺物(2)	22
第3図 周辺遺跡分布図	7	第22図 SI 5	23
倉谷荒田遺跡		第23図 SI 5 出土遺物(1)	24
第4図 調査地周辺の地形	8	第24図 SI 5 出土遺物(2)	25
第5図 調査前地形測量図		第25図 SB 1	26
及び基本層序概念図	9	第26図 SK 4	27
第6図 調査地土層断面図	10	第27図 SK 5	27
第7図 IV層上面検出遺構配置図	11	第28図 IV層出土遺物	27
第8図 V層上面地形測量図		第29図 SK 6	28
及びV層上面検出遺構配置図	12	第30図 SK 7 土層断面図	28
第9図 VI層上面地形測量図		第31図 表土及び攪乱土出土遺物	30
及びVI層上面検出遺構配置図	12	第32図 暦年較正図(OxCal4.1): 試料1	35
第10図 SK 1	13	第33図 暦年較正図(OxCal4.1): 試料2	35
第11図 SK 2	14	第34図 暦年較正図(OxCal4.1): 試料3	36
第12図 SK 3	14	第35図 暦年較正図(OxCal4.1): 試料4	36
第13図 SI 4	16	第36図 暦年較正図(OxCal4.1): 試料5	37
第14図 SI 4 床面直上出土遺物	17	第37図 暦年較正図(OxCal4.1): 試料6	37
第15図 SI 4 P 1 ⑦層出土遺物	17		
第16図 SI 4 ④層出土遺物	17	松河原上奥田第3遺跡	
第17図 SI 4 ②・③層出土遺物	17	第38図 松河原上奥田第3遺跡	
第18図 SI 4 ①層及び埋土中出土遺物	18	調査地平面図及びSK 1	42
第19図 SI 3	21		

挿表目次

表1 遺構名新旧対照表		表7 土器観察表(2)	31
表2 SI 4 ピット計測表	17	表8 石器観察表	31
表3 SI 3 ピット計測表	21	表9 鉄器観察表	32
表4 SI 5 ピット計測表	23	表10 AMS年代測定結果	34
表5 SB 1 ピット計測表	26	表11 鳥取県内における	
表6 土器観察表(1)	30	弥生時代中期の遺構内出土鉄器	38

巻頭図版目次

倉谷荒田遺跡

巻頭図版 1	1	調査地周辺の地形 (調査後：北東から)	巻頭図版 2	1	SI 4 出土鉄器
	2	調査地周辺の地形 (調査後：東から)		2	SI 5 出土鉄器

文中写真目次

写真 1	倉谷荒田遺跡現地説明会風景	…………… 3	松河原上奥田第 3 遺跡
倉谷荒田遺跡			写真 3
写真 2	年代測定試料	…………… 33	SK 1 調査風景(北西から)
			…………… 41

図版目次

倉谷荒田遺跡

PL. 1	1	調査地周辺の地形(北から)	PL. 7	1	SI 4 遺物出土状況 (貼床除去前：南西から)
	2	調査地周辺の地形(南から)		2	SI 4 遺物出土状況 (貼床除去前：東から)
PL. 2	1	調査地周辺の地形(東から)	PL. 8	1	SI 4 出土土器
	2	調査地周辺の地形(北東から)		2	SI 4 出土石器
PL. 3	1	調査地北側完掘状況(西から)	PL. 9	1	SI 4 ②層鉄器(F 2)出土状況 (南東から)
	2	調査地完掘状況(南から)		2	SI 4 ①層鉄器(F 4)出土状況 (北東から)
PL. 4	1	SK 1 完掘状況(東から)		3	SI 4 ①層鑄造鉄斧(F 3)出土状況 (北から)
	2	SK 1 土層断面(南から)		4	SI 4 検出状況(北から)
	3	SK 2 完掘状況(北から)	PL.10	1	SI 4 出土鉄器(F 1～4)
	4	SK 2 土層断面(北から)		2	SI 4 出土鉄器(F 1・2・4) X線写真
	5	SK 3 完掘状況(西から)	PL.11	1	SI 4 ①層出土鑄造鉄斧(F 3)
	6	SK 3 土層断面(南から)		2	SI 4 ①層出土鑄造鉄斧(F 3) X線写真
PL. 5	1	SI 4 床面施設完掘状況 (貼床除去前：北から)	PL.12		SI 4 ①層出土鑄造鉄斧(F 3) CTスキャン等画像
	2	SI 4 完掘状況(貼床除去後：北から)	PL.13	1	SI 3～5 完掘状況(俯瞰)
	3	SI 4 貼床土層断面(南西から)		2	SI 3 完掘状況(西から)
	4	SI 4 土層断面 (B-B' ベルト：南東から)	PL.14	1	SI 3 床面検出状況(南東から)
	5	SI 4 土層断面 (A-A' ベルト：北西から)		2	SI 3 P 1 完掘状況(南西から)
PL. 6	1	SI 4 床面直上遺物出土状況 (貼床除去前：北東から)		3	SI 3 P 1 土層断面(南西から)
	2	SI 4 P 1 土層断面(南から)		4	SI 3 床面施設検出状況 (S 5：南西から)
	3	SI 4 P 1 ⑤層石器(S 1)出土状況 (東から)		5	SI 3 床面直上出土石器(S 5)
	4	SI 4 床面直上鉄器(F 1)出土状況 (西から)	PL.15	1	SI 3 土層断面(南東から)
	5	SI 4 ③層炭化材出土状況(南東から)			

- | | | | | | |
|-------|---|---------------------------------|-------|---|------------------------|
| | 2 | SI3 土層断面(B-B' ベルト：西から) | PL.20 | 1 | SI5 遺物出土状況(北西から) |
| | 3 | SI3 遺物出土状況(南東から) | | 2 | SI5 ④層土器(16)出土状況(南西から) |
| | 4 | SI3 検出状況(南東から) | | 3 | SI5 ④層土器(14)出土状況(南西から) |
| | 5 | SI3 ①層出土土器(8・9) | PL.21 | 1 | SB1 完掘状況(北西から) |
| PL.16 | 1 | SI5 床面検出状況(北西から) | | 2 | SB1 P1 土層断面(北から) |
| | 2 | SI5 土層断面
(調査地東壁C-C' ライン：西から) | | 3 | SB1 P2 土層断面(南から) |
| | 3 | SI5 土層断面(A-A' ベルト：南西から) | | 4 | SB1 P5 土層断面(南から) |
| | 4 | SI5 土層断面(B-B' ベルト：南東から) | PL.22 | 5 | SB1 P6 土層断面(南から) |
| PL.17 | 1 | SI5 床面直上炭化物検出状況 | | 1 | SK4 完掘状況(東から) |
| | 2 | SI5 P2 ⑥層遺物出土状況(西から) | | 2 | SK4 土層断面(北東から) |
| | 3 | SI5 ⑤層遺物出土状況(南から) | | 3 | SK4 検出状況(西から) |
| | 4 | SI5 ⑦層鉄器(F5～8)出土状況
(北東から) | | 4 | SK5 完掘状況(東から) |
| | 5 | SI5 ⑤層鉄器(F9)出土状況
(南西から) | PL.23 | 5 | SK5 土層断面(南東から) |
| | 6 | SI5 ④層遺物(S7・F10)出土状況
(南西から) | | 6 | SK5 検出状況(東から) |
| | 7 | SI5 ③層鉄器(F11)出土状況
(北西から) | | 1 | SK6 炭化物検出状況(北から) |
| PL.18 | 1 | SI5 出土鉄器(F5～11) | | 2 | SK6 土層断面(北東から) |
| | 2 | SI5 出土鉄器(F5～11) X線写真 | | 3 | SK6 検出状況(西から) |
| PL.19 | | SI5 ⑥層出土袋状鉄斧(F5)
CTスキャン等画像 | | 4 | SK7 土層断面(西から) |
| | | | | 5 | IV層出土土器及び
調査地内出土土器 |

松河原上奥田第3遺跡

- | | | |
|-------|---|---------------|
| PL.24 | 1 | 調査地完掘状況(北から) |
| | 2 | SK1 完掘状況(北から) |
| | 3 | SK1 土層断面(西から) |

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

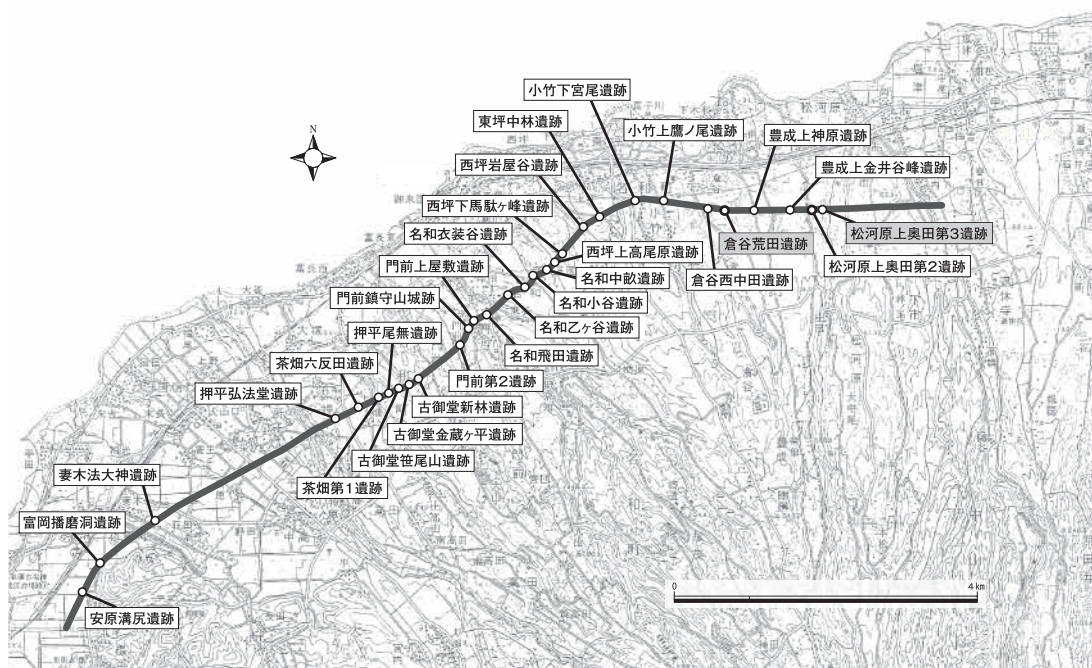
本調査は、平成21年度一般国道9号名和淀江道路の改築に伴い行った、西伯郡大山町倉谷地内倉谷荒田遺跡及び、西伯郡大山町松河原地内松河原上奥田第3遺跡の発掘調査である。

山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県西部地域では、米子道路、名和淀江道路の一部が自動車専用道路として共用されている。

このうち、大山町を通る名和淀江道路の計画地内及び隣接地には、多くの周知の埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」）があり、建設に先立って計画地内の遺跡の有無並びに遺跡の範囲・内容を確認する必要性が生じた。このため、平成2年度から旧大山町及び旧名和町各教育委員会、平成19年度から大山町教育委員会によって、国庫補助事業として逐次試掘、確認調査が行われた。

その結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、平成12年度から平成16年度にかけて、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり、安原溝尻遺跡など17箇所の遺跡発掘調査を行い、平成17・18年度から鳥取県埋蔵文化財センターが調査主体となり、門前上屋敷遺跡など4箇所の遺跡発掘調査、平成20年度では小竹下宮尾遺跡など2箇所の遺跡発掘調査を行い、各報告書が刊行された。

平成21年度は、西坪上高尾原遺跡、西坪下馬駄ヶ峰遺跡、小竹上鷹ノ尾遺跡、倉谷西中田遺跡、倉谷荒田遺跡、豊成上神原遺跡、豊成上金井谷峰遺跡、松河原上奥田第3遺跡が本調査の対象となり、鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当着手した。



第1図 名和淀江道路関係遺跡位置図

【参考文献】

『名和町内遺跡分布調査報告書』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第26集 2000 名和町教育委員会

『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第33集 2004 名和町教育委員会

『大山町内遺跡発掘調査報告書 安原所在遺跡・平第2遺跡』大山町埋蔵文化財調査報告書10 1990 大山町教育委員会

第2節 調査の経過と方法

1 調査区の名称と調査方法

倉谷荒田遺跡の現況は、山林である。平成21年度は、調査に先立ち当該年度調査対象範囲の調査前地形測量を業者委託し、調査に取り掛かった。重機表土剥ぎ後、世界測地系国土座標第V系に載るよう調査区内に10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東杭名を採った。座標は、B 2杭(X:-54230m、Y:-72420m)、C 7杭(X:-54280m、Y:-72410m)などとなった。標高値は、国土交通省2級基準点H18-2-4の63.143mを使用した。

松河原上奥田第3遺跡の現況は、水田である。重機表土剥ぎ後、国土交通省が設置したセンター杭No.47(X:-54284.9618m、Y:-71222.7780m)、国土交通省4級基準点H18-4-12(X:-54285.496m、Y:-71192.513m)を遺構測量の基準点として調査を行った。標高値は、国土交通省4級基準点H18-4-12の71.191mを使用した。

検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる測量を行った。現地での写真撮影及び遺物写真撮影は35mm判、ブローニー(6×7)判カメラ、4×5判カメラを用い、白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用し、適宜デジタルカメラも使用した。

2 調査の経過

1 倉谷荒田遺跡の調査経過

平成21年度調査は、工事が先行される調査地西側部分を対象に調査を行うこととなった。重機による表土剥ぎ作業は、8月31日から9月2日にかけて行ったが、排土処理の関係及び調査区内を通る農道の付け替え工事などが予定されたため計2回に亘り随時表土剥ぎ作業を行った。9月7日から方眼測量を実施し、9月10日から検出作業に取り掛かった。遺構検出及び掘下げ作業は、11月27日まで行った。途中11月8日には、一般の方を対象とした現地説明会を開催したところ、県内外から78名の方々に参加いただいた。その後11月24日・25日に調査後地形測量、11月26日に調査後航空写真撮影を実施し、11月27日にすべての作業を終了した。

調査の結果、縄文時代の落とし穴3基、弥生時代中期の竪穴住居跡1棟、古墳時代以前の掘立柱建物跡1棟、貯蔵穴1基、土坑1基、古墳時代前期の竪穴住居跡2棟、近世以降の製炭土坑1基などを検出した。調査面積は、1,450㎡となった。なお、調査区東側については、平成23年度以降に調査が行われる予定となっている。

2 松河原上奥田第3遺跡の調査経過

調査は、平成21年11月17日に重機表土剥ぎ作業を行い、11月20日から11月25日まで遺構検出、掘り下げ作業、測量作業を実施した。11月25日にすべての作業を終了した。

調査の結果、大山町教育委員会の試掘調査で確認された落とし穴1基のみであった。調査面積は、12㎡となった。

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

平成21年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 久保 穰二郎
次 長 中尾 淳一（兼総務係長）
総 務 係

副 主 幹 福島 良
主 事 浜辺 奈都美

発掘事業室

室 長 山根 雅美（兼調整係長）

調 整 係

発掘調査員 岩垣 命

調査担当（琴浦調査事務所）

副 主 幹 牧本 哲雄（統括責任者兼松河原上奥田第3遺跡調査担当責任者）
文化財主事 森本 倫弘（倉谷荒田遺跡調査担当責任者）
石原 憲人（倉谷荒田遺跡調査担当）

調査日誌抄

倉谷荒田遺跡

8月31日 表土剥ぎ開始
9月7日 方眼測量開始
9月10日 発掘作業員稼働開始
11月8日 現地説明会開催
11月24日 調査後測量開始
11月26日 調査後航空撮影
11月27日 調査終了

松河原上奥田第3遺跡

11月17日 表土剥ぎ開始
11月20日 発掘作業員稼働開始
11月25日 調査終了



写真1 倉谷荒田遺跡現地説明会風景

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

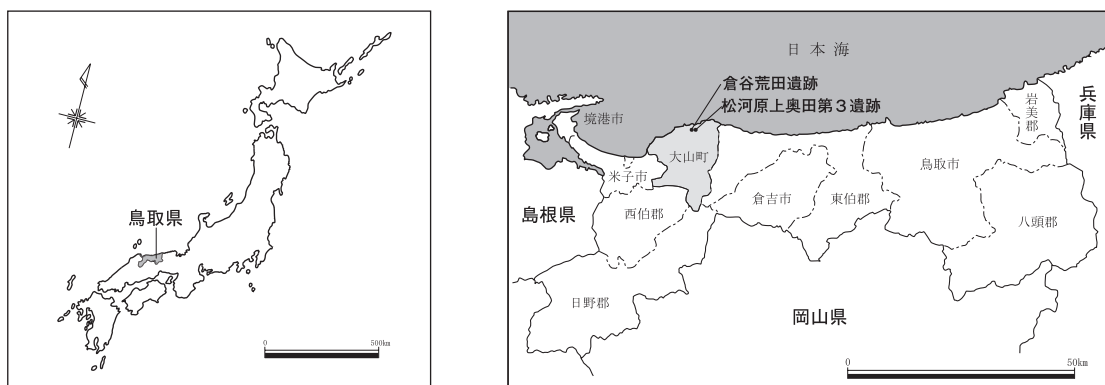
倉谷荒田遺跡、松河原上奥田第3遺跡が所在する大山町は、鳥取県西部、西伯郡の北東部を占める位置にあり、県庁所在地の鳥取市からは西へ約80km、県西部中核都市の米子市に隣接する。町域は、南端の大山(1,729m)を頂点に、船上山(615m)から金屋付近の日本海に至る線を東辺とし、西辺は大山を頂点に下槇原・孝霊山(751m)を結び保田付近の日本海に至る、不整逆三角状に広がる形を呈す。東西約15km、南北約20km、総面積は約189.8km²を測り、人口は約18,478人(平成22年1月)の農畜産漁業・観光を主な産業にする町である。

本町の地勢は、大山山系から放射状に流れる小河川により開削並びに侵食され残った、手指状に延びる台地上の尾根と急峻な小溪谷が繰り返す火山性台地と、甲川、下市川、真子川、名和川、阿弥陀川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で、特に阿弥陀川流域は県内でも屈指の広さとなる扇状地を形成している。台地は、御来屋砂礫層上に主に大山火山灰土の堆積したもので、海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山系に源流を發する河川の他、大小計12本の川が日本海に注いでいる。

倉谷荒田遺跡・松河原上奥田第3遺跡は、同町の東西ほぼ中央で農免農道沿いに位置し、海岸線から約1.8kmにある丘陵上に立地している。倉谷荒田遺跡の標高は約63m、松河原上奥田第3遺跡は約71mを測る。遺跡のある丘陵は大山から北に延びる尾根の裾にあたり、南北に走る小さな谷によって刻まれている。両遺跡はこれらの丘陵を東西方向に横断するように広がっており、果樹園・水田・林地などの中に位置している。

第2節 歴史的環境

大山町内では近年、国道9号の改築に伴う発掘調査をはじめ、発掘調査が多数行われている。ここでは倉谷荒田遺跡、松河原上奥田第3遺跡の周辺である大山町の中央から東側に位置する、おおよそ旧名和町及び旧中山町に所在する遺跡について、時代ごとに概要を述べる。



第2図 遺跡位置図

旧石器時代 近年大山山麓では、発掘調査によって後期旧石器遺物が確認されるようになった。門前第2遺跡(西畝地区)(107)では、AT火山灰層以下(25,000年以前)で黒曜石製ナイフ形石器・黒曜石剥片を含む石器群が確認されている。その他、名和小谷遺跡(113)では黒曜石製国府型ナイフ形石器が、押平尾無遺跡(103)では角錐状石器が出土している。

縄文時代 当該地域は、県内においてもこの時期の遺跡が多数存在する地域である。退休寺、羽田井、上大山、大仙道、陣構、坊領、荘田などでは、草創期と考えられる有茎尖頭器、局部磨製石斧が表採されている。早期では、門前第2遺跡(菖蒲田地区)(107)で押型文土器とともに10基の配石群、名和飛田遺跡(110)では早期末から前期の土坑が検出されている他、遺構は伴わないが赤坂後口山遺跡(71)、退休寺飛渡り遺跡(75)、古御堂金蔵ヶ平遺跡(105)、上大山第1遺跡(36)、角塚遺跡(39)、高田第4遺跡(34)、蛇居谷遺跡、大道原遺跡、塚田遺跡、蔵岡第1遺跡(37)、茶畑山道遺跡(20)などで押型文土器等が出土している。前期では、石器工房と推定される下市築地ノ峯東通第2遺跡(59)、名和乙ヶ谷遺跡(111)で玦状耳飾が出土している。中期では、貯蔵穴が確認された細工塚遺跡(63)などがある。後期では、南川遺跡(9)で石組炉を備えた住居跡、晩期では、大塚第3遺跡(1)で住居跡が見ついている。その他、落とし穴が八重第3遺跡(91)、小松谷遺跡(68)、下甲抜堤遺跡(70)、赤坂後口山遺跡、門前上屋敷遺跡(109)、門前第2遺跡、小竹下宮尾遺跡(118)、西坪岩屋谷遺跡(115)など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地縁辺部が利用された様子が窺われる。

弥生時代 この地域では前期の遺構は少なく、大塚岩田遺跡(2)で環濠の可能性のある溝が検出されている他、樋口第1遺跡(87)、三谷遺跡(98)などで土器が出土している程度である。中期になると遺跡数が増え、集落遺跡として細工塚遺跡、退休寺遺跡(74)、退休寺飛渡り遺跡、殿河内落合遺跡(73)、押平弘法堂遺跡(100)、名和飛田遺跡、門前上屋敷遺跡等が挙げられる。また、茶畑山道遺跡、茶畑第1遺跡(102)では独立棟持柱を備える大型掘立柱建物をもつ集落が検出され、当該地域の拠点的な集落と考えられている。後期には、退休寺遺跡、八重第3遺跡、大塚塚根遺跡(3)、押平尾無遺跡、茶畑第2遺跡(29)、茶畑六反田遺跡(101)、茶畑第1遺跡、東高田遺跡(30)、小竹下宮尾遺跡など丘陵上に集落遺跡が多数造営される。その中で、複数の丘陵上に展開する国史跡妻木晩田遺跡は、弥生時代中期以降夥しい数の住居・倉庫、四隅突出型墳丘墓、環濠などが造られるなど、集落研究にとって重要な遺跡である。当該期には、松尾頭地区において、首長居宅と考えられる竪穴住居跡と近接して祭殿と考えられる二面庇の高床建物跡も確認されている。終末期の墳墓としては、徳楽方墳(25)、松尾頭1・2号墓、門前1号墓(107)がある。

古墳時代 当該地域では、各時期において前方後円墳は確認されていない。前期では、小規模な方墳が茶畑第1遺跡で確認されているにすぎない。当該地域の古墳は、ほとんどが中期から後期にかけてのものであるが、中期のものうち、高塚古墳(54)、ハンボ塚古墳(12)は、葺石・埴輪などの外表施設を持つ大型円墳で、首長墳の内容を持つ。後期になると御崎古墳群(79)、東積古墳群(99)、三谷古墳群(97)、高田古墳群(32)、門前古墳群(17)、豊成古墳群(44)、坪田古墳群(14)、富長山村古墳群(15)、蔵岡古墳群、宮内古墳群(27)、平古墳群(24)などが形成されている。このうち、御崎古墳群では塊石を用いた箱式石棺を有し、鳥取県中部地域に特徴的に見られる壺型埴輪が出土しており、他地域との交流がうかがわれる。また、岩屋堂古墳(52)、長野2号墳、岩屋平ル古墳(95)、三谷16号墳、東積11号墳、高田26・27号墳(31)、茶畑12号墳、豊成28号墳(45)、宮内1・2号墳、平狐塚古墳など切石積み横穴式石室をもつものがあり、米子市淀江町域までの同一文化圏を形成している。また、高田25号

墳は、横穴式石室内に家形石棺を内包する。当地域は豊成横穴群など横穴群も形成されている。この時代の集落は、依然丘陵上に営まれる傾向が強く、前期の茶畑第1遺跡、中期から後期の押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡(104)、名和中畝遺跡(114)、大塚塚根遺跡、仁王堂遺跡、住吉第2遺跡(67)などがある。名和川の河岸段丘上には名和飛田遺跡、門前上屋敷遺跡がある。

古代 7世紀後半以降、山陰地方で仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22カ所の古代寺院が見つかっており、当該地域では高田原廃寺(33)がある。ここでは、乱石積基壇や溝状遺構が検出され、上淀廃寺式の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦が出土している。その他、名和神社付近の長者原遺跡(13)が、『延喜式』に記載された古代山陰道の和奈駅(奈和の誤記か)として推定されている他、礎石建物、区画溝、大量の炭化米がみつまっていることから、汗入郡の正倉とも推定されているがいずれも明確ではない。大塚屋敷遺跡(4)では、倉庫群と考えられる掘立柱建物群が見つまっている。栃原窯跡(41)は須恵器窯と考えられるが、上寺谷たたら(42)の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、炭窯の可能性も指摘されている。細工塚遺跡では大型の掘立柱建物群が検出され、平安時代の官衙関連遺構や有力層の建物と想定されている。名和衣装谷遺跡(112)では2棟の大型掘立柱建物や鉄滓、緑釉・灰釉陶器が見つかっており、郡司層の居宅又は郡衙下部の鉄生産に関わる遺構と考えられている。茶畑六反田遺跡では、条里区画の一部と見られる溝が検出され、緑釉陶器や墨書土器が出土している。名和乙ヶ谷遺跡、小竹下宮尾遺跡では道路状遺構が検出されている。また、大山寺は、密教隆盛とともに信仰の中心的な役割を果たし、地方豪族に並ぶ僧兵勢力を有すようになる。なお、当該地域の古代の行政区画は、汗入郡東積郷、汗入郷、奈和郷、尺度郷、高住郷に属する。

中世 律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。門前上屋敷遺跡では、中世の田畠跡の他、屋敷地を区画すると考えられる大溝、貿易陶磁が検出されている他大規模な造成が認められ、居館又は寺院跡の指摘もある。門前礎石群は、青白磁・染付などの出土から中世以降の礎石建物と考えられる。旧名和町域には名和氏一族に関わるとされる旧跡が各所に見られる。その他、籠津豊後守敦忠の居城とされる石井垣城(72)、天守山城、香原山城、松尾城などの他、富長城(5)、長野城(46)、末吉城、福尾城など日本海沿岸部にも多く砦跡が築かれている。門前鎮守山城跡(108)では、大規模な土塁・堀切が検出された。門前第2遺跡では、中世から近世・近代にかけての大規模な墓地が形成される。

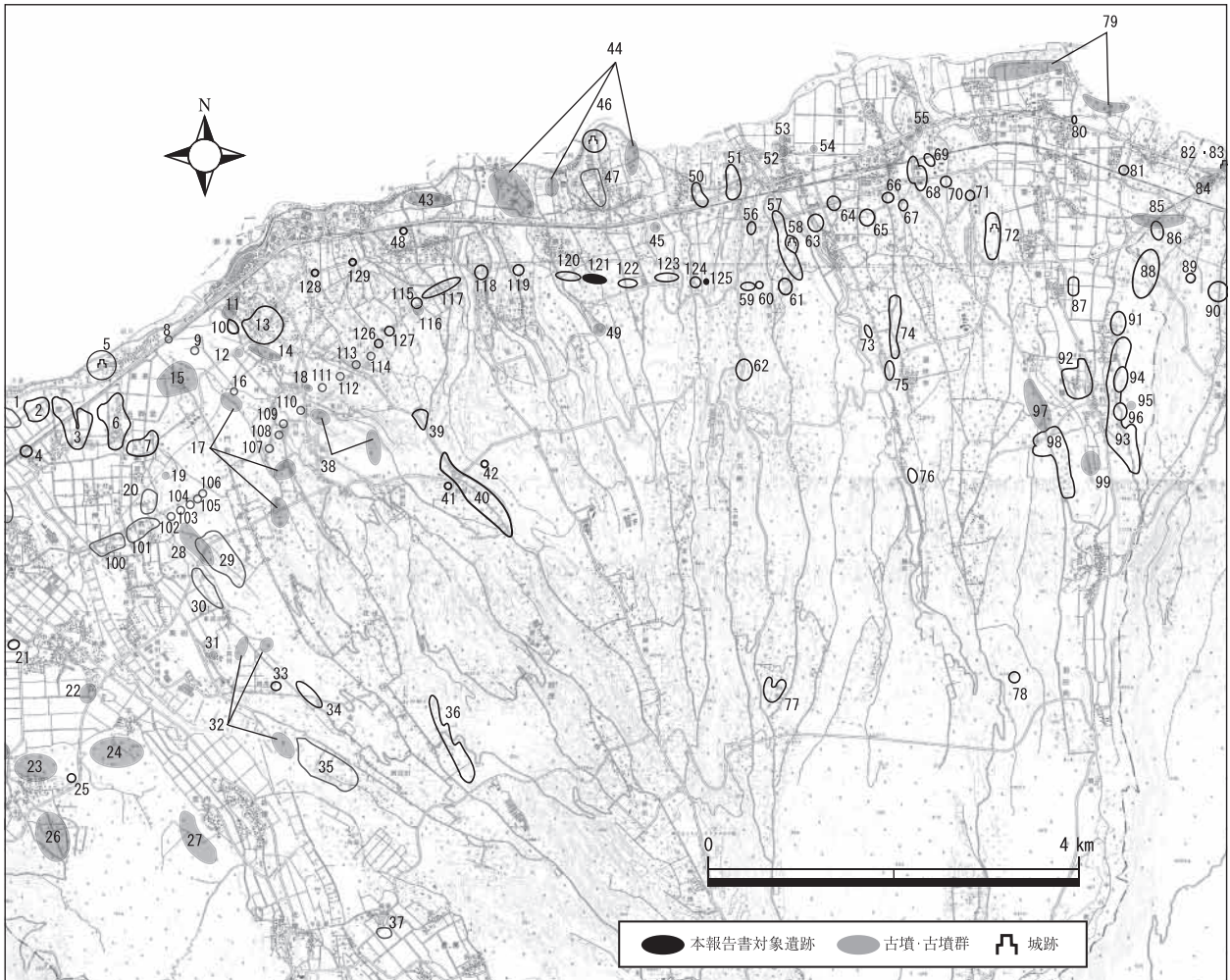
近世 寛永9(1632)年に池田光仲が鳥取藩主となり、因伯は幕末まで池田氏の治世となる。この時代、御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占めた。

倉谷荒田遺跡・松河原上奥田第3遺跡の調査は、大山裾野に縄文時代の狩猟場として一例を加えるほか、弥生時代中期、及び古墳時代前期の集落が営まれ、遺跡周辺にも当該期の遺跡が広がることを示唆するものといえるだろう。

【参考文献】

- 『名和町誌』1978 名和町誌編纂委員会編
- 『鳥取県の古墳』1986 鳥取県埋蔵文化財センター
- 『旧石器・縄文時代の鳥取県』1988 鳥取県埋蔵文化財センター
- 『歴史時代の鳥取県』1989 鳥取県埋蔵文化財センター
- 『県史31 鳥取県の歴史』(株)山川出版社1997 内藤正中・真田廣幸・日置衆左エ門著
- 『鳥取県中世城館分布調査報告書』第2集(伯耆編)2004 鳥取県教育委員会
- 『新修中山町誌』2009 中山町誌編集委員会編

発掘調査報告書類については割愛させていただいた。



- | | | | | |
|-------------|---------------|-----------------|-----------------|----------------|
| 1 大塚第3遺跡 | 27 宮内古墳群 | 53 岡3号古墳 | 79 御崎古墳群 | 105 古御堂金蔵ヶ平遺跡 |
| 2 大塚岩田遺跡 | 28 茶畑古墳群 | 54 高塚古墳 | 80 御崎第2遺跡 | 106 古御堂新林遺跡 |
| 3 大塚塚根遺跡 | 29 茶畑第2遺跡 | 55 曲松古墳群 | 81 田中川上遺跡 | 107 門前第2遺跡 |
| 4 大塚屋敷遺跡 | 30 東高田遺跡 | 56 築地峯東通遺跡 | 82 籠津城 | 108 門前鎮守山城遺跡 |
| 5 富長城跡 | 31 高田26号墳 | 57 林之峯東通遺跡 | 83 籠津古墳群 | 109 門前上屋敷遺跡 |
| 6 古御堂遺跡 | 32 高田古墳群 | 58 天守山遺跡 | 84 坂ノ上古墳群 | 110 名和飛田遺跡 |
| 7 文殊領屋敷遺跡 | 33 高田原廃寺 | 59 下市築地ノ峯東通第2遺跡 | 85 梅田(栄田)古墳群 | 111 名和乙ヶ谷遺跡 |
| 8 荒田遺跡 | 34 高田第4遺跡 | 60 下市築地ノ峯東通第3遺跡 | 86 梅田六ノ塚遺跡 | 112 名和衣裳谷遺跡 |
| 9 南川遺跡 | 35 高田第10遺跡 | 61 要害ノ峯遺跡 | 87 樋口第1遺跡(樋口遺跡) | 113 名和小谷遺跡 |
| 10 馬郡遺跡 | 36 上大山第1遺跡 | 62 築地ノ峰第3遺跡 | 88 梅田荳峯遺跡 | 114 名和中畝遺跡 |
| 11 名和公園裏古墳群 | 37 蔵岡第1遺跡 | 63 細工塚遺跡 | 89 梅田東前谷中峯遺跡 | 115 西坪岩屋谷遺跡 |
| 12 ハンボ塚古墳 | 38 梶原古墳群 | 64 向畑遺跡 | 90 籠津乳母ヶ谷第2遺跡 | 116 西坪岩屋谷古墳 |
| 13 長者原遺跡 | 39 角塚遺跡 | 65 住吉第4遺跡 | 91 八重第3遺跡 | 117 東坪中林遺跡 |
| 14 坪田古墳群 | 40 栃原遺跡 | 66 住吉第1遺跡 | 92 樋口第2遺跡 | 118 小竹下宮尾遺跡 |
| 15 富長山村古墳群 | 41 栃原窯跡 | 67 住吉第2遺跡 | 93 八重第4遺跡 | 119 小竹上鷹ノ尾遺跡 |
| 16 門前礎石群 | 42 上寺谷たたら | 68 小松谷遺跡 | 94 八重第1遺跡 | 120 倉谷西中田遺跡 |
| 17 門前古墳群 | 43 東坪古墳群 | 69 林之峯遺跡 | 95 岩屋平ル古墳 | 121 倉谷荒田遺跡 |
| 18 長綱時古墳群 | 44 豊成古墳群 | 70 下甲拔堤遺跡 | 96 八重第2遺跡 | 122 豊成上神原遺跡 |
| 19 原3号墳 | 45 豊成28号墳 | 71 赤坂後口山遺跡 | 97 三谷古墳群 | 123 豊成上金井谷峰遺跡 |
| 20 茶畑山道遺跡 | 46 長野城跡 | 72 岩井垣城跡 | 98 三谷遺跡 | 124 松河原上奥田第2遺跡 |
| 21 清原遺跡 | 47 浜ノ坂遺跡 | 73 殿河内落合遺跡 | 99 東積古墳群 | 125 松河原上奥田第3遺跡 |
| 22 中高遺跡 | 48 龍光寺掘遺跡 | 74 退休寺遺跡 | 100 押平弘法堂遺跡 | 126 西坪上高尾原遺跡 |
| 23 長田古墳群 | 49 倉谷横穴墓 | 75 退休寺飛渡り遺跡 | 101 茶畑六反田遺跡 | 127 西坪下馬駝ヶ峰遺跡 |
| 24 平古墳群 | 50 松河原第1遺跡 | 76 退休寺第1遺跡 | 102 茶畑第1遺跡 | 128 名和下葛蒲谷遺跡 |
| 25 徳楽方墳 | 51 松河原第2遺跡 | 77 二本松遺跡 | 103 押平尾無遺跡 | 129 西坪三軒屋遺跡 |
| 26 源平山古墳群 | 52 岩屋堂古墳(岡古墳) | 78 羽田井遺跡 | 104 古御堂笹尾山遺跡 | |

第3図 周辺遺跡分布図

第3章 倉谷荒田遺跡の調査

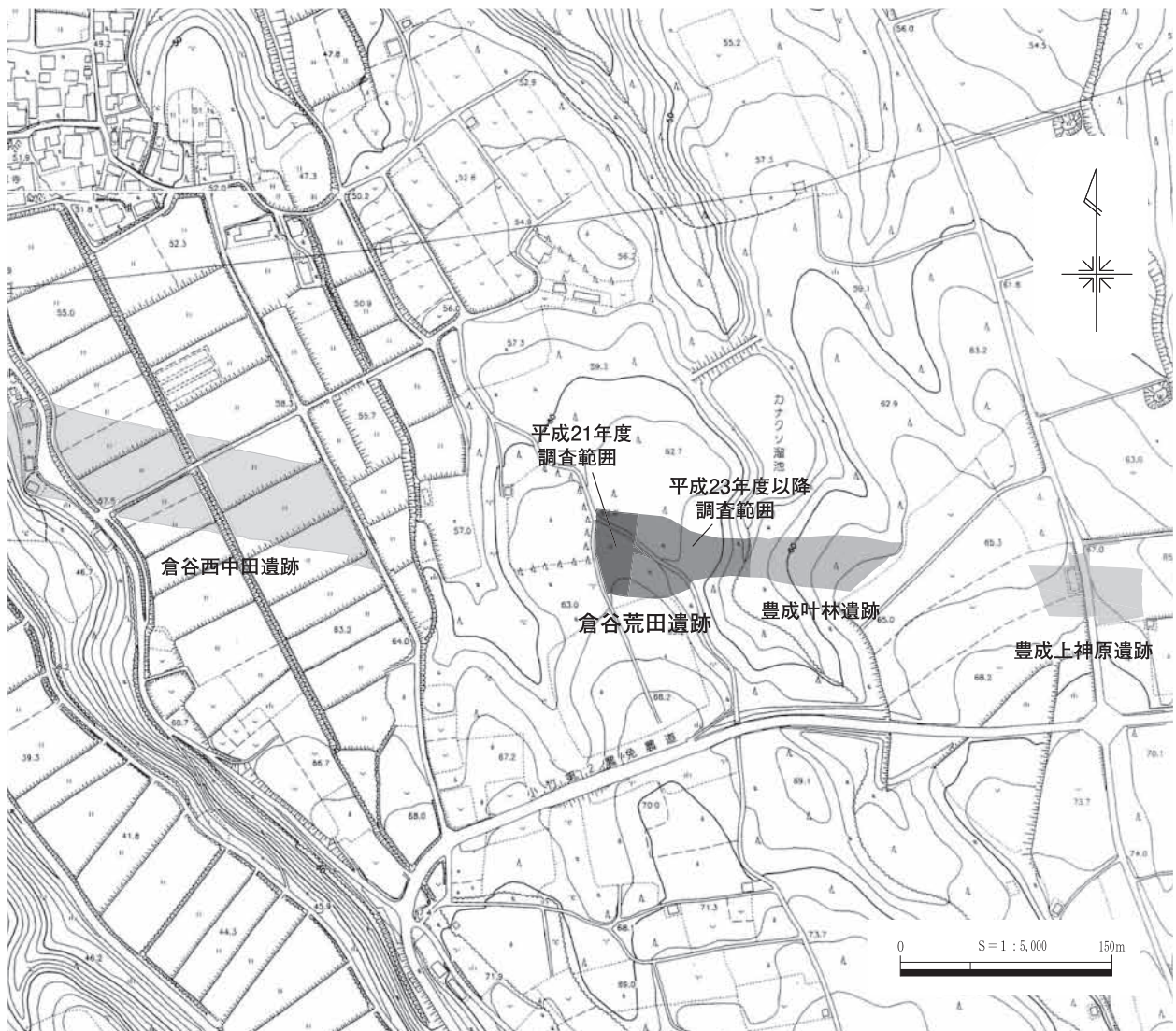
第1節 遺跡の立地と層序

1 遺跡の立地（第4図、巻頭図版1、PL. 1・2）

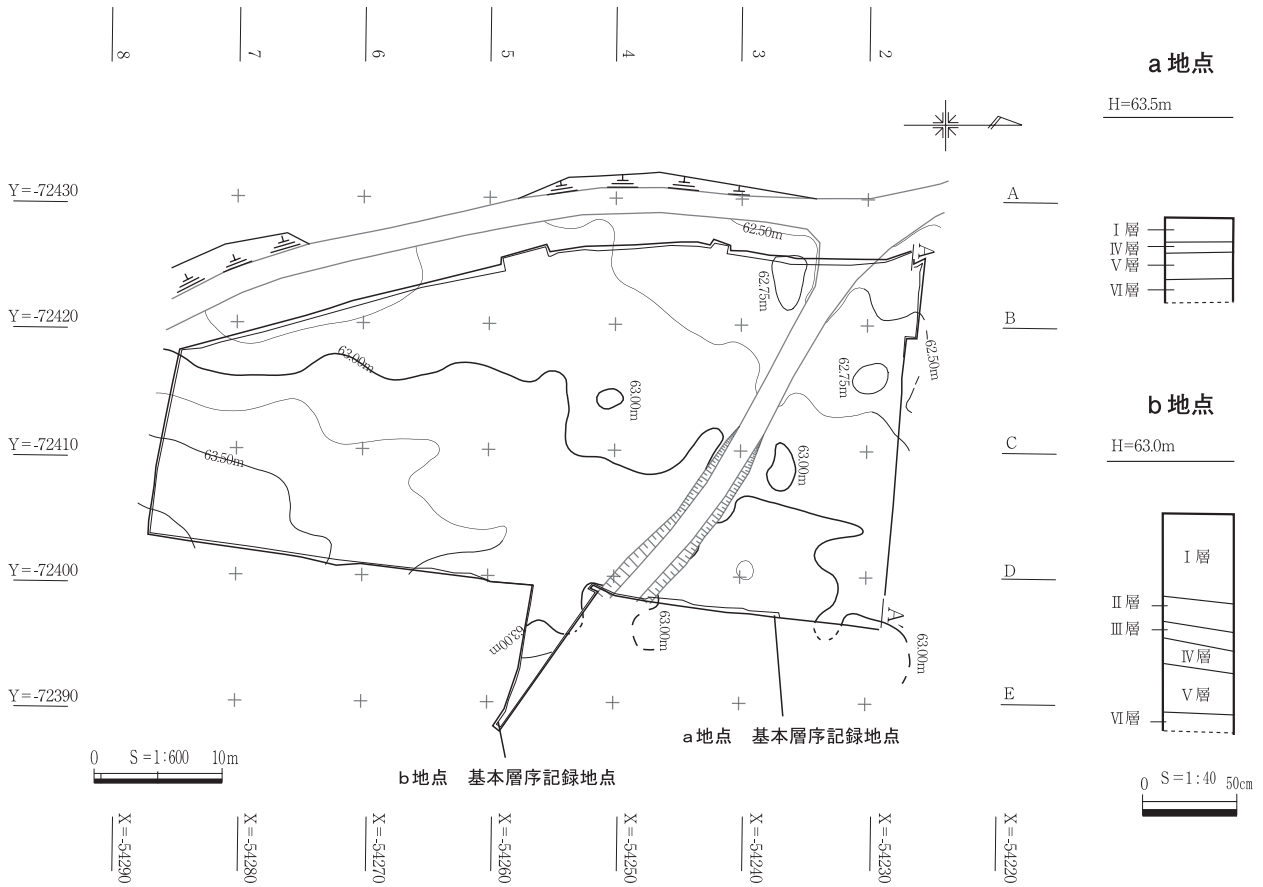
倉谷荒田遺跡は、大山北麓から派生する丘陵上、および谷部に所在する。丘陵は、大山山系から流れ出る大小の河川により浸食を受け、放射状に谷が形成されている。調査地は、日本海へ向けて北側に緩やかに傾斜し、丘陵の東西については急峻となり、谷地形となっている。調査地の標高は約63mである。

今回の調査は、丘陵頂部付近を対象として実施した。調査地は概ね平坦で起伏は少ないものの、南西側は緩斜面となる。調査前の状況は山林であった。調査地西側、および南側の隣接地は果樹園として利用されている。なお、調査地内北側には、北西-南東方向の農道が通っている。

本遺跡の西側には倉谷西中田遺跡があり、東側には豊成叶林遺跡が隣接する。



第4図 調査地周辺の地形



第5図 調査前地形測量図及び基本層序概念図

2 基本層序 (第5～6図)

調査地内の堆積については、調査地北壁、調査地東壁、およびSK 4を断ち割った箇所の上層断面を利用して記録を行った。以下、その概要を述べる。

I層：表土。におい黄褐色を呈する堆積である。締まり、粘性ともに弱い。

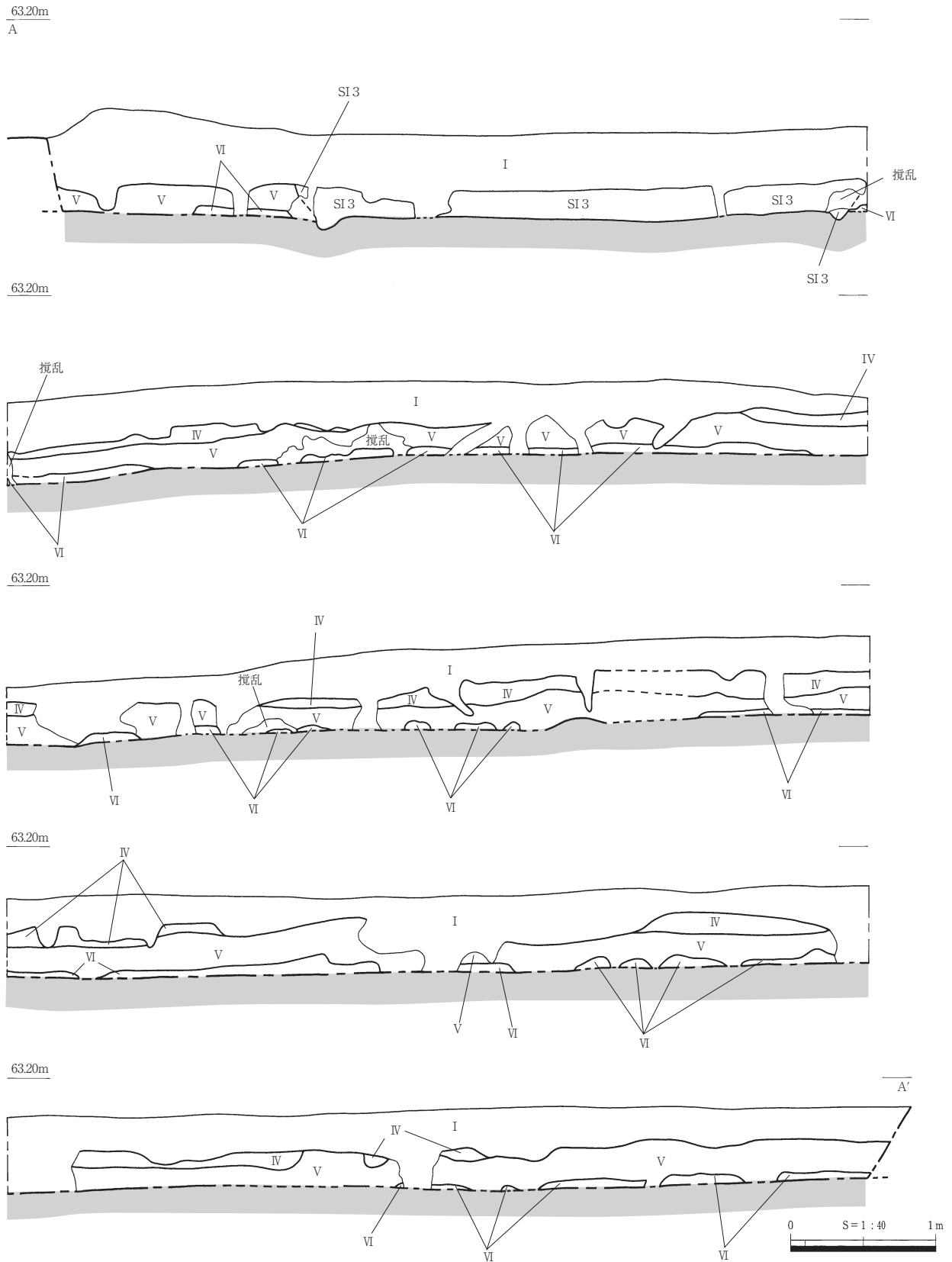
II層：褐色土(10YR4/4)。調査地東側の傾斜変換点付近から谷部の未調査地方向に堆積が広がる。土層断面において堆積の一部を確認したのみである。土壌化が進んでいる。遺物は出土していない。

III層：褐灰色土(10YR5/1)。調査地東側の傾斜変換点付近から谷部の未調査地方向に堆積が広がる。土層断面において堆積の一部を確認したが、平面的な広がりには確認できなかった。遺物は出土していない。

IV層：褐灰色土(10YR4/1)。古墳時代前期の竪穴住居跡を被覆し、弥生時代中期から古墳時代後期の遺物を包含する。古墳時代前期から堆積が始まり、少なくとも古墳時代後期までは堆積が続いている。調査地北東側に最大20cmの厚みで堆積する。南東側は、遺存状態が悪い。

V層：黒褐色土(10YR3/1)。調査地全域に約10～20cmの厚みで堆積する。古墳時代前期以前に帰属する遺構は、当層上面が遺構検出面となる。遺物は出土していない。

VI層：におい黄褐色土(10YR5/3)。ローム漸移層である。SK 1・3はこの層の上面で検出した。この層を含め、これより下位の堆積は無遺物層である。



第6図 調査地土層断面図

第3章 倉谷荒田遺跡の調査

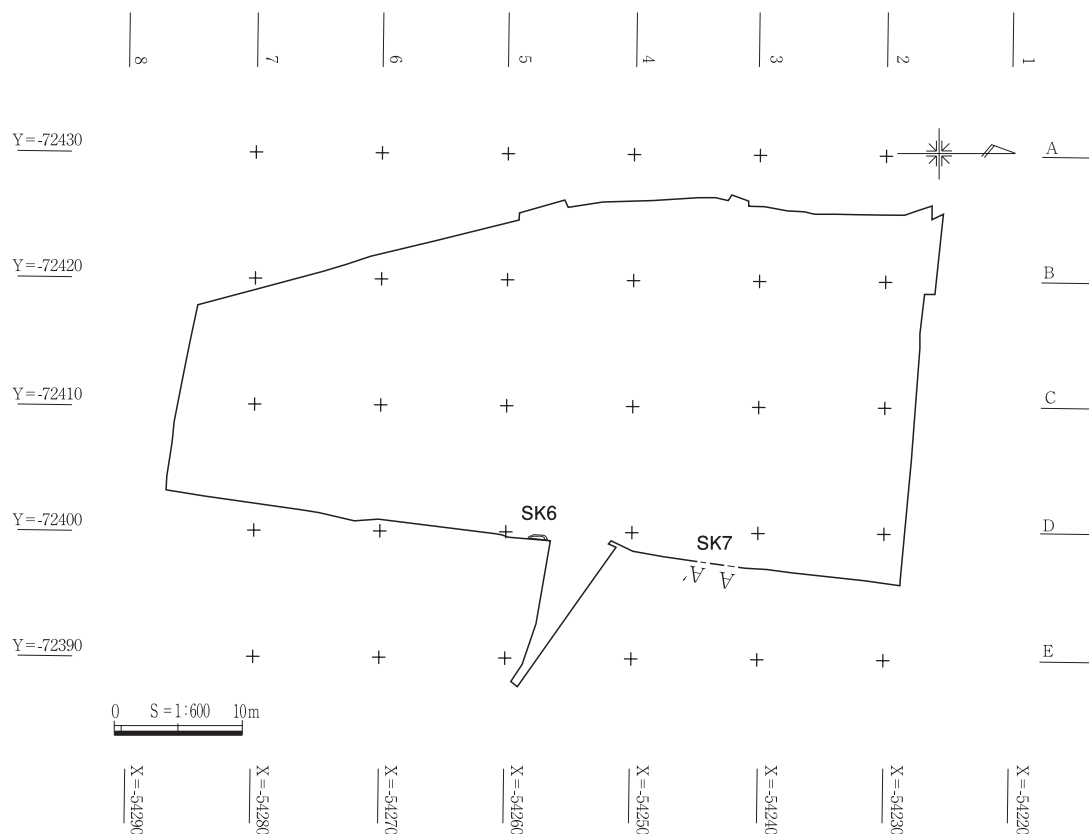
第2節 調査の概要（第7～9図、表1）

調査の結果、褐灰色土(IV層)上面、黒褐色土(V層)上面、VI層(にぶい黄褐色土)上面の3面において、縄文時代から古墳時代、及び近世以降の遺構を検出し、古墳時代前期から堆積がはじまり後期まで堆積が続く包含層(IV層)1層を確認した。IV層上面では近世以降の遺構、V層上面では縄文時代から古墳時代の遺構、VI層上面では縄文時代の遺構を検出した。VI層上面において確認した遺構については、V層に由来するとみられる黒褐色土を埋土にもつこと、V層上面において縄文時代に帰属する土坑を1基(SK2)を確認したことから、本来的にはV層上面を遺構面とする遺構群である可能性が高い。なお、IV層は遺存状態が悪く、IV層上面の地形測量は行っていない。

検出した遺構は、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土坑7基である。遺構は、調査地平坦面から東側の緩斜面にかけて検出し、西側の緩斜面では検出していない。全体的にみて、遺構密度は希薄である。遺構名称については調査時と報告時が異なるため、凡例に対照一覧を示した(表1)。

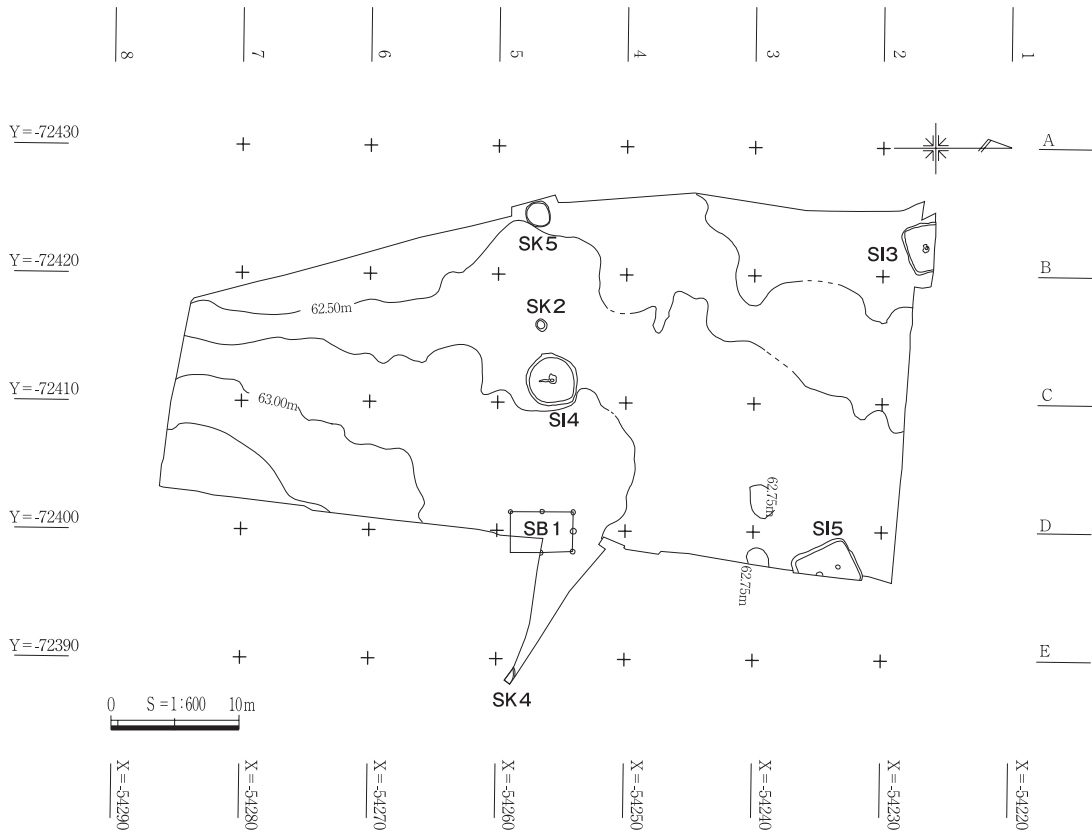
また、本遺跡では、平成20年度に確認調査を実施した(1)。確認調査時において2棟の竪穴住居跡を検出し(SI1・2)、埋土中から遺物が出土している。よって混乱を防ぐため、今回の調査において新たに検出した竪穴住居跡については、確認調査時の遺構番号を踏襲し、続き番号を付した(SI3～5)。

今回の調査で検出した遺構のうち、SI4は弥生時代中期後葉の竪穴住居跡である。床面直上から出土した1点を含め、合計4点の鉄器が出土している。さらに、古墳時代前期の竪穴住居跡SI5からは7点の鉄器が出土し、当地においては、弥生時代中期後葉に鉄器が導入され、古墳時代前期にはかなり普及したものとみられる。また、古墳時代前期の竪穴住居跡SI3は、床面で検出した被熱痕跡と近接した状態で、被熱した台石が出土し、火気をとまう何らかの作業が行われた状況が確認できた。

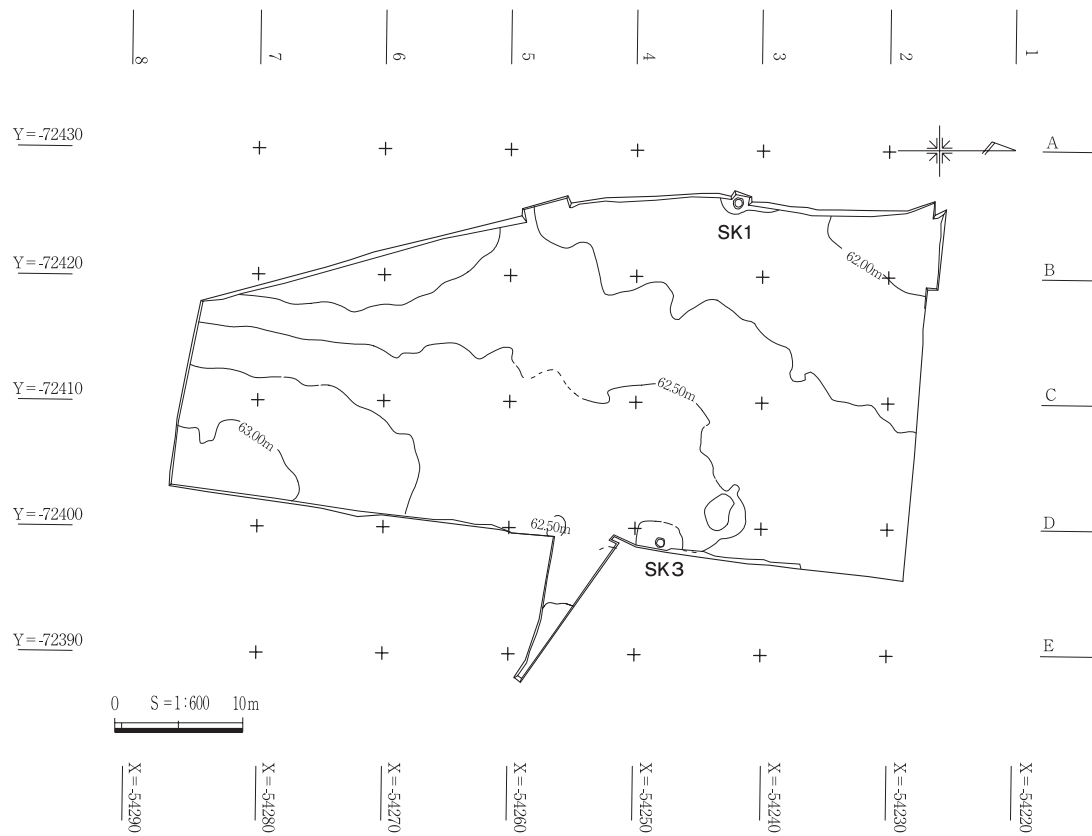


第7図 IV層上面検出遺構配置図

第3章 倉谷荒田遺跡の調査



第8図 V層上面地形測量図及びV層上面検出遺構配置図



第9図 VI層上面地形測量図及びVI層上面検出遺構配置図

遺物は、主に竪穴住居跡から出土したほか、IV層及び表土、攪乱土から出土している。ほぼ完形品である鑄造鉄斧などの鉄器をはじめ、弥生土器、土師器、石器が出土した。

なお、調査地の東側については、平成23年度以降に調査が行われる予定である。

(1)『小竹下宮尾遺跡 西坪岩屋谷遺跡』2010 鳥取県埋蔵文化財センター

第3節 縄文時代の調査

1 概要

調査地平坦面において、土坑3基(SK1～3)を検出した。SK1～3は全てVI層上面で調査を実施したが、SK2はトレンチ断面により、V層上面から掘削されていることがわかった。いずれも平面形は円形を呈し、底面にピットを有するもの(SK2・3)、ピットを有しないもの(SK1)が存在する。遺構内から遺物は出土していないが、遺構の形態から落とし穴と判断し、縄文時代に帰属するとした。

なお、I層(表土)から安山岩製の石鏃が1点出土した。

2 土坑

SK1(第10図、PL.4)

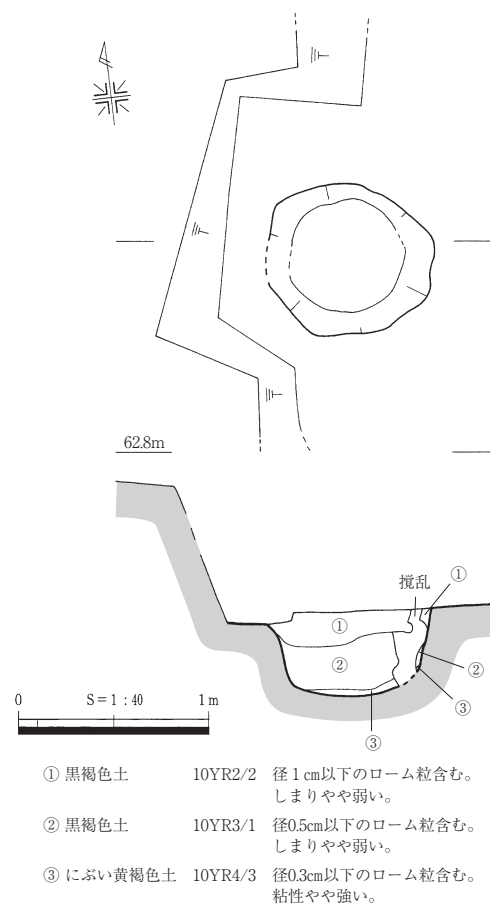
A3グリッド、丘陵尾根頂部平坦面の標高62.00m付近に位置する。VI層上面で検出した。平面形は円形で長軸0.85m、短辺0.80m、断面形はU字状で検出面からの深さは0.46mを測る。埋土は3層に分層でき、黒褐色土を主体とする。なお、土坑底面にピットは検出していない。遺物は出土していない。

形態的特徴から落とし穴とし、本遺構の帰属時期を縄文時代と判断した。

SK2(第11図、PL.4)

B4グリッド、丘陵尾根頂部平坦面の標高62.40m付近に位置する。本遺構は遺構検出時にサブトレンチを掘削し、遺構がV層上面より掘削されることを確認したが、V層上面で平面形を明確にすることができず、面的な掘り下げはVI層上面で実施した。

平面形は円形で、長軸0.93m、短軸0.80mを測る。断面形態は逆台形で、検出面からの深さは0.90mを測る。埋土は10層に分層でき、黒褐色土を主体としている。底面中央部には底面施設とみられるピットを1基検出した。ピットの平面形は円形で、直径17cm、底面からの深さは37cmを測る。ピットの埋土は、黒褐色(⑨層)及び、褐灰色(⑩層)の色調を呈し、いずれも比較



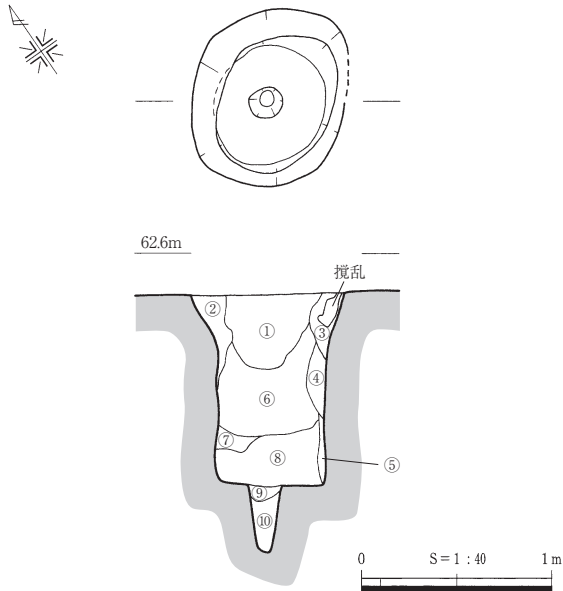
第10図 SK1

的しまりが弱い堆積である。遺構内から、遺物は出土していない。

形態的特徴から本遺構を落とし穴とし、帰属時期を縄文時代と判断した。

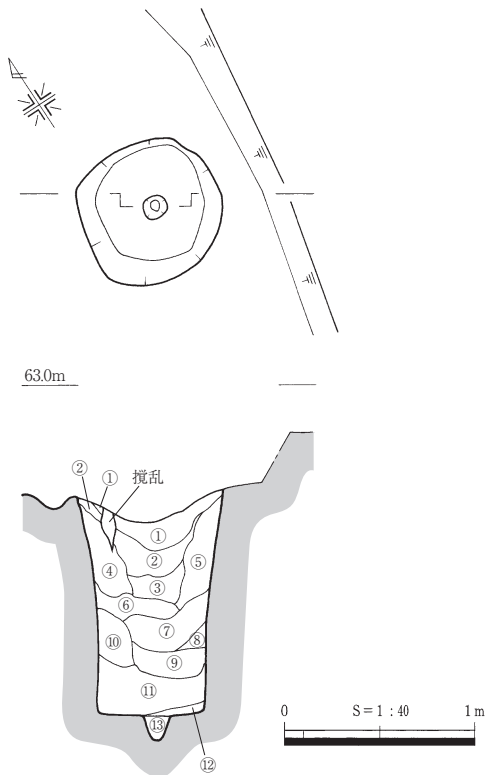
SK3 (第13図、PL.4)

D3グリッド、丘陵尾根頂部平坦面の標高62.50m付近に位置する。V層除去後、VI層上面で検出した。平面形は円形で長軸0.93m、短軸0.82m、検出面からの深さは1.10mを測る。断面形は逆台形である。埋土は13層に分層でき、黒褐色土を主体となす。一部、ローム層に由来するとみられる土が



- ① 黒褐色土 10YR3/1 しまり中。粘性強い。
- ② 褐灰色土 10YR5/1 径1.5cm以下のロームブロック含む。粘性やや強い。
- ③ 褐灰色土 10YR5/1 粘性やや強い。
- ④ 褐灰色土 10YR4/1 径0.3cm以下のローム粒含む。粘性やや強い。
- ⑤ 褐灰色土 10YR5/1 径0.5cm以下のローム粒多量に含む。しまり弱い。
- ⑥ 黒褐色土 10YR3/1 径1.5cm以下のロームブロック含む。しまりやや強い。粘性強い。
- ⑦ 灰黄褐色土 10YR4/2 径0.5cm以下のローム粒含む。粘性やや強い。
- ⑧ 黒褐色土 10YR3/1 径0.5cm以下のローム粒含む。しまりやや強い。粘性強い。
- ⑨ 黒褐色土 10YR3/1 径1cm以下のローム粒含む。しまり弱い。粘性強い。
- ⑩ 褐灰色土 10YR6/1 径0.5cm以下のローム粒含む。しまり弱い。

第11図 SK2



- ① 黒褐色土 10YR2/2 径1cm以下のローム粒少量含む。粘性やや強い。
- ② 黒褐色土 10YR3/2 径1cm以下のローム粒含む。粘性やや強い。
- ③ 黒褐色土 10YR2/2 径0.5cm以下のローム粒少量含む。粘性やや強い。
- ④ にぶい黄褐色土 10YR4/3 径1cm以下のローム粒少量含む。
- ⑤ にぶい黄褐色土 10YR5/3 径1cm以下のローム粒少量含む。
- ⑥ 灰黄褐色土 10YR4/2 径0.5cm以下のローム粒少量含む。径0.5cm以下の炭化物極少量含む。粘性やや強い。
- ⑦ 黒褐色土 10YR3/1 径1mm以下のローム粒含む。粘性やや強い。
- ⑧ 灰黄褐色土 10YR5/2 径1cm以下のローム粒少量含む。粘性やや強い。
- ⑨ 黒褐色土 10YR3/1 径1cm以下のローム粒少量含む。粘性やや強い。
- ⑩ 灰黄褐色土 10YR5/2 径0.5cm以下のローム粒少量含む。粘性やや強い。
- ⑪ 灰黄褐色土 10YR4/2 径1.5cm以下のロームブロック少量含む。粘性やや強い。
- ⑫ 灰黄褐色土 10YR6/2 径0.5cm以下のローム粒含む。粘性やや強い。
- ⑬ 褐灰色土 10YR6/1 径0.3cm以下のローム粒含む。しまり弱い。粘性やや強い。

第12図 SK3

堆積する。いずれも、遺構周辺からの流入土であり、遺構廃棄後に自然な堆積を経て埋まったと考えられる。土坑底面中央部には、ピット1基を検出した。ピットは円形で直径が11cm、底面からの深さは14cmを測る。埋土は褐灰色土で、しまりが弱い。遺構内から遺物は出土していない。

形態的特徴から本遺構を落とし穴と考え、帰属時期を縄文時代と判断した。

第4節 弥生時代の調査

1 概要

調査地平坦面に、平面形が円形を呈する竪穴住居跡1棟を検出した。出土遺物から判断し、弥生時代中期後葉に帰属する遺構である。床面には貼床を施し、中央ピットを有するものの、床面及び遺構周辺においても柱穴は認められない。遺構内からは、計4点の鉄器が出土し、床面直上出土の棒状鉄器(F1)のほか、埋土最上層(①層)から鑄造鉄斧(F3)が出土した。

遺物は、遺構内のほか、IV層及び表土、攪乱土から弥生土器が出土している。

なお、遺跡西側に近接する倉谷西中田遺跡(1)では、弥生時代後期の竪穴住居跡を2棟確認し、調査地内から弥生時代後期の遺物が出土している。

2 竪穴住居跡

SI4 (第13～18図、巻頭図版2、PL.5～12、表2)

A・C4グリッド、丘陵平坦面に位置する。I層除去後、V層上面で検出した。検出面の標高は62.70mである。本遺構は、北東隅を部分拡張している。平面形は概ね円形を呈すが、拡張した北東側はやや突出する。検出面での規模は、長軸4.00m、短軸3.80m、検出面からの深さは0.50mを測る。埋土は、遺構周囲からの流入土とみられる褐色土を主体とする。

床面には、約3cmの厚みをもって貼床が施され、その範囲は拡張前の床面の範囲と概ね一致する。このことから、貼床は拡張前に施されたものであり、建物を拡張した際には、拡張前の貼床とほぼ同一レベルに合わせて床面を成形し、拡張部分の床面には貼床が施されなかったものとする。拡張後の床面壁際には断面U字形の周壁溝が全周している。拡張前の周壁溝については北東側の一部のみを確認した。本来は全周していた可能性が高く、南西側の大部分については、拡張前の周壁溝を拡張後に再利用したものとする。

床面中央部には、中央ピット(P1)を検出した。床面上にはP1以外のピットはなく、柱穴は存在しない。また、竪穴周辺においても、ピットは検出していない。P1は、平面形はやや不正な隅丸方形を呈し、貼床面での規模は、長軸77cm、短軸50cm、貼床面からの深さは17cmを測る。埋土は4層に分層でき(⑦～⑩層)、にぶい黄褐色土が主体をなす。P1が重複した痕跡は認められず、床面拡張後に中央ピット全体を拡張したもしくは、床面拡張の後に中央ピットを踏襲していたと考えることができる。

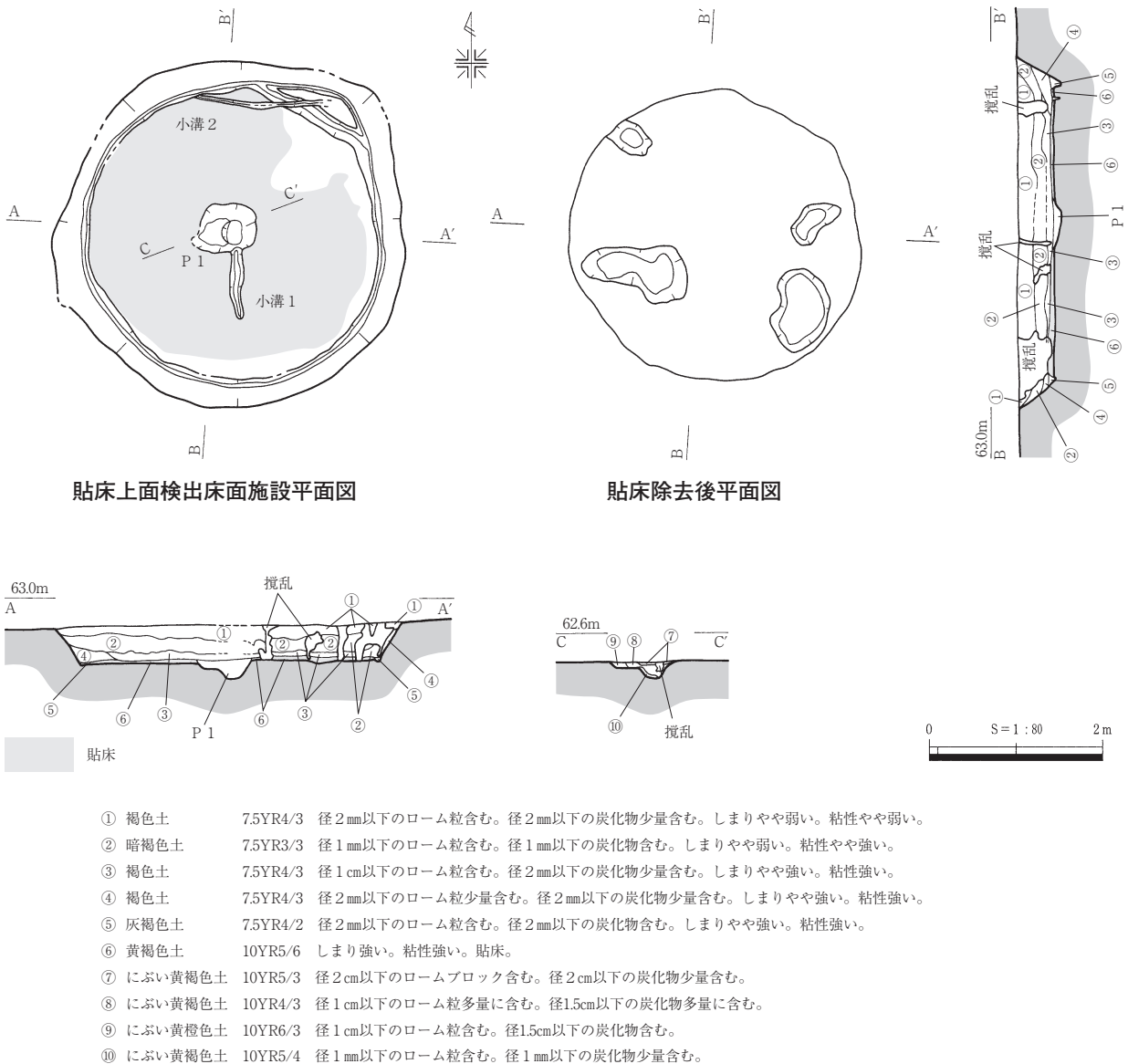
P1南側には、南北を主軸とする小溝1を検出した。小溝1はP1と連結し、溝の底面の比高差は中央ピット側が約3cm低い。床面北側には、小溝2を検出した。小溝2は幅15cm、断面V字の直線的な溝であり、東西を主軸とする。底面レベルはほぼ一定であり、比高差は認められない。小溝2は、拡張前の周壁溝の一部を切っていることから、拡張後の床面施設である。溝の形態から仕切り溝などの可能性が考えられる。

床面施設を調査した後、貼床の除去を行った。貼床下には、土坑状の落ち込みを4基検出した。いずれも、深さ3～6cm程度の浅い落ち込みであり、埋土は貼床(⑥層)であった。平面は不整形を呈し、落ち込み底面には凹凸があり、一定ではない。落ち込み内から遺物は出土せず、貼床除去後の遺構底面には、これら4基の落ち込み以外には検出していない。これらのことから判断し、4基の落ち込みは床面施設であるとは考えられず、竪穴掘削時における掘削痕跡の可能性を考える。

なお、埋土下層にあたる③層から建築部材とみられる炭化した板材が1点出土した。

遺物は、埋土中から土器や石器、鉄器が出土した。主に①～③層で出土し、床面直上からは甕片(1)と鉄製品(F1)が出土したのみである。1は肩部～胴部上半が張り出す形態をなし、頸部に貼付突帯が施される。貼付突帯はナデ付けられ、退化している。外面はハケ調整がなされ、胴部にはミガキが施される。弥生時代中期後葉に比定される。F1は断面方形の棒状鉄製品である。片側端部が撥形に開いている。鑿状の工具と考える。

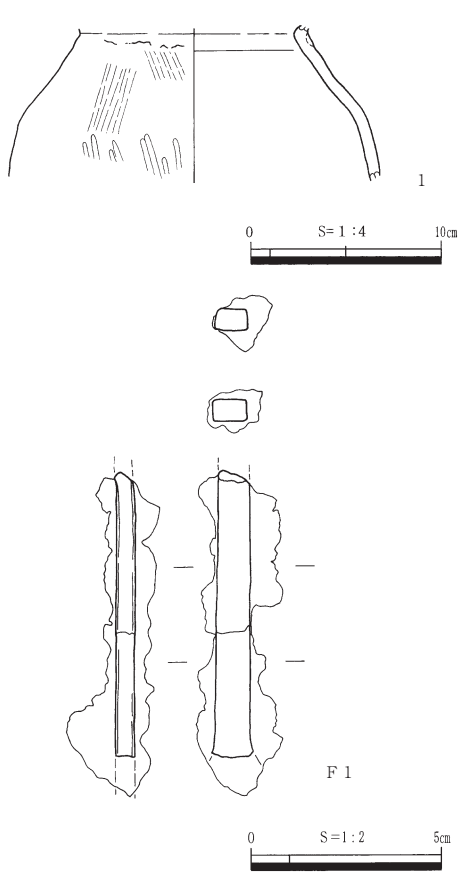
④層からは砥石S2が出土した。4面に砥面が認められ、金属器の使用痕跡とみられる擦痕が著し



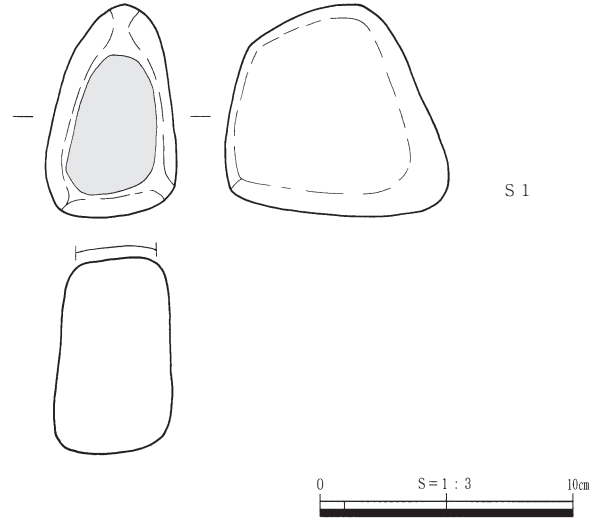
第13図 SI4

表2 SI4ピット計測表

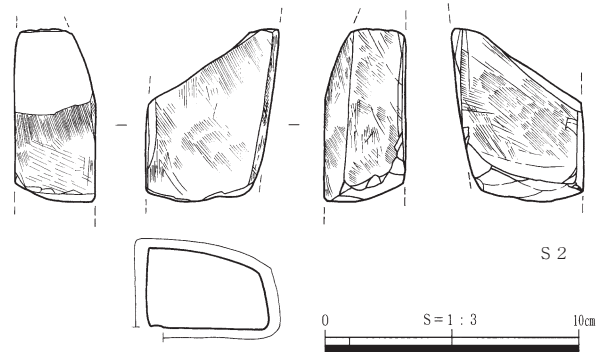
ピット 番号	平面形	規模(cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
P 1	円	77	50	17	



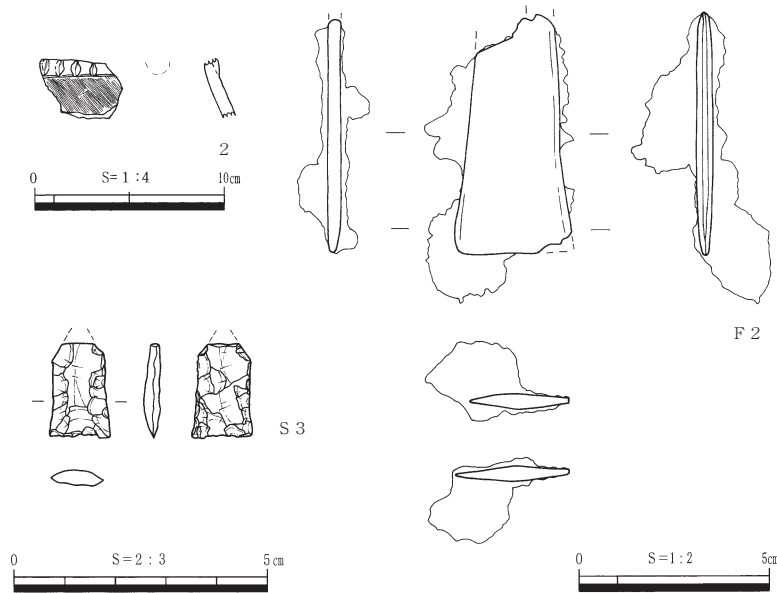
第14図 SI4床面直上出土遺物



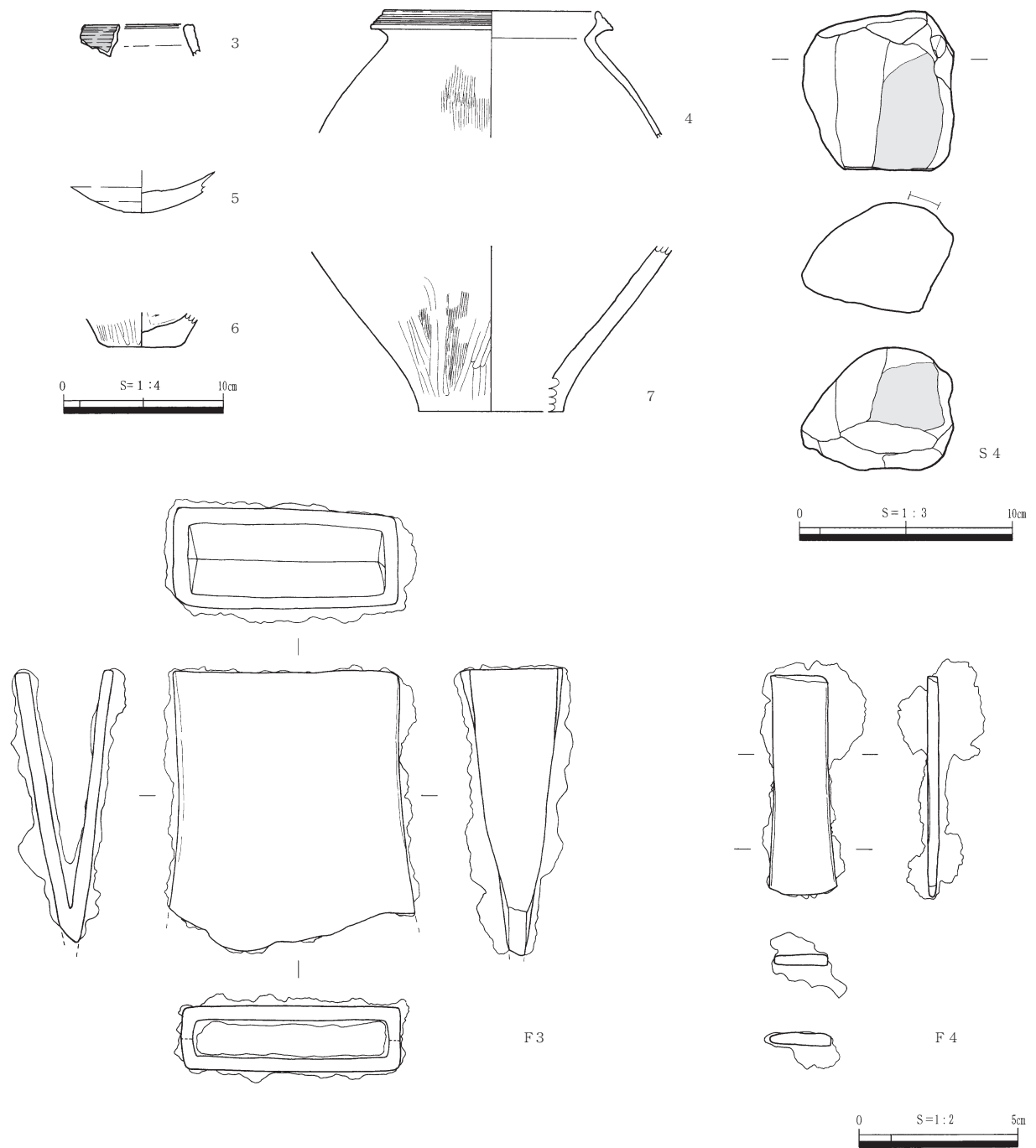
第15図 SI4 P 1 ⑦層出土遺物



第16図 SI4 ④層出土遺物



第17図 SI4 ②・③層出土遺物



第18図 SI4①層及び埋土中出土遺物

い。③層からは安山岩製の平基式五角形鏃S 3が出土した。②層からは甕2、F 2が出土した。2は頸部の破片で貼付突帯が施される。弥生時代中期後葉に比定される。F 2は板状鉄製品である。両端は欠損し、下端は撥形に開く。

①層からは土器片3～7、S 4、F 3・4が出土した。3は無頸壺の口縁部である。口縁帯および口唇端部に赤彩が施される。4は甕で下半部は欠損する。胴部が張り出す形態で、口縁帯には凹線文が施される。肩部から胴部外面はハケ調整がなされる。弥生時代中期後葉に比定される。5・6は甕ないし壺の底部である。7は底部片である。平底で、胴部にかけてゆるやかにひろがる器形をなす。外面にはハケ調整後、不定方向のミガキが施される。F 3は竪穴の北側壁際で刃部を上に向けて、竪穴内に斜めに落ち込むように出土した。刃部が欠損しているものの、ほぼ完存する鑄造鉄斧である。

形態は箱形をなし、刃部が撥形に開く。袋部の横断面は六角形状を呈する。また、二条突帯はない。袋部側面には鋳バリの痕跡が観察できるものの、刃部側面については錆化のため観察できない。F3のCTスキャン画像を観察すると、刃部と袋部の間が短いこと、側面の形状が袋部から刃先までのラインがなめらかではなく、刃部付近で角度を変えて刃先に至ることから、研ぎ直しなどの再加工が行われたと考えられる。袋部は原形をとどめていることから、袋部への再加工は行われていない。形態的な特徴からF3は、弥生時代中期に遡るものではなく、弥生時代後期から古墳時代前期のものであり、舶載品であると考え(2)。F4は板状鉄製品である。刃部にかけてひろがる形態である。

本遺構の廃絶時期は、床面直上出土土器の年代観より、弥生時代中期後葉と判断する。①層において弥生時代後期から古墳時代前期に比定される鋳造鉄斧(F3)が出土したことから、本遺構の最終的な埋没終了時期は弥生時代後期から古墳時代前期に下るものとする。

また、床面直上及びP1⑦層より出土した炭化物(炭化物分析試料No.1・2)について放射性炭素年代測定を行った。分析の結果、弥生時代中期を示す年代値(2σ暦年代範囲:BC191-46年ほか)が得られた。本遺構の廃絶時期とも、矛盾しない。

(1)『倉谷西中田遺跡』2011 鳥取県埋蔵文化財センター

(2) 広島大学文学部准教授 野島 永氏御教示による。

第5節 古墳時代の調査

1 概要

調査地平坦面から調査地東側の緩斜面にかけて、竪穴住居跡2棟(SI3・5)、掘立柱建物跡1棟(SB1)、土坑2基(SK4・5)を検出した。検出した竪穴住居跡は、いずれも平面方形を呈し、古墳時代前期に帰属するものである。SI3は床面に中央ピットが存在する段階(古段階)、中央ピットが埋め戻され、床面として平滑に成形されている段階(新段階)に分けることができる。新段階の床面中央部には被熱痕跡が認められるとともに、被熱した台石が床面直上で出土している。

SI5は調査地東側で検出し、遺構東側の約半分は調査地外となる。調査地東側の隣接地は、今後、発掘調査が実施される予定であり、SI5の調査については、その際に合わせて行うこととなった。よって、今回の調査では、柱穴等の床面施設の掘り下げは行っていない。調査終了後は、埋め戻しを行い。遺構はシートで保護した。SI5は、埋土中から古墳時代前期の土師器が多量に出土したほか、鉄器が7点出土した。床面の検出状況から判断し、主柱穴は2本であると想定している。

そのほかの遺構については、IV層に被覆されていることから判断し、古墳時代後期以前に帰属する遺構と考える。

遺物は、遺構内を中心に、IV層、I層(表土)などから土師器、石器、鉄器が出土した。

なお、当遺跡は確認調査を実施した際に、今回の調査区の東側で、古墳時代に帰属する竪穴住居跡を2棟(SI1・2)検出した(1)。このことから、比較的規模の大きな集落が調査地周辺に広がっている可能性がある。周辺の状況としては、東に約0.9kmに位置する豊成上金井谷峰遺跡において、古墳時代前期の集落を確認している(2)。

(1)『小竹下宮尾遺跡 西坪岩屋谷遺跡』2010 鳥取県埋蔵文化財センター

(2)『豊成上神原遺跡 豊成上金井谷峰遺跡』2011 鳥取県埋蔵文化財センター

2 竪穴住居跡

SI3 (第19～21図、PL.13～15、表3)

A1グリッド、丘陵の尾根頂部平坦面、標高62.00m付近に位置する。IV層除去後に、V層上面で検出した。一部は調査地外に延びるものの、平面形は方形と判断できる。竪穴の規模は、一辺3.90m程度、検出面からの深さは約0.18mを測る。埋土は3層に分層でき、①・②層は黒褐色土、③層はローム層に由来する流入土とみられる。

床面中央部で台石(S5)が出土した。S5には破面があり、この周囲では破片が飛び散ったような状況で出土した。これらの破片はS5の破面に接合するものがあった。S5上面と側面にはいずれも被熱により赤化した痕跡を確認し、周囲で出土した石片にも被熱の痕跡を確認した。S5周囲の床面においても、20～30cmの楕円形の焼土を2箇所検出した。これらのことから、中央部において火を使用した行為が行われたと考える。

S5を取り上げ後、床面で中央ピット(P1)を検出した。P1の平面形は不整形で、規模は長軸60cm、短軸49cm、床面からの深さは11cmを測る。埋土は2層で、④・⑤層は①～③層とは明らかに異なる様相で、色調を異にし、ローム層に由来するブロックを多量に含むほか、かなり硬くしまっていた。④・⑤層は人為的に埋め戻された堆積と判断した。

床面壁際には、周壁溝を検出した。埋土は灰褐色土である。幅5～15cm、断面はU字状を呈し、床面からの深さは3～7cmを測る。周壁溝は調査し得た範囲では途切れることなく巡る。なお、本遺構床面および遺構周辺を精査したが、柱穴は検出していない。

遺物は、①層から土器が出土している。土器8・9を凶化した。8は甕の口縁部である。口径が広く天神川編年では甕Bとされる器形である(牧本1999)。口縁部が外傾して立ち上がり、口縁端部には明確な面がある。頸部の外面はミガキにより調整される。天神川II期(古墳時代前期前葉)に帰属するものとする。9は甕の口縁部であり、口縁帯には凹線文を施す。弥生時代中期後葉に比定されるものである。床面直上出土のS5は、台石である。形態は不整五角形で、平滑な面があり、被熱により赤化した痕跡が認められる。

なお、床面直上で炭化材が出土している。出土した炭化材(試料No.3・4)については自然科学分析を行っており、弥生時代後期から古墳時代前期を示す年代値(2σ暦年代範囲: AD255-391年ほか)を得ている(第3章第9節)。出土遺物の年代観に比較し、大きな相違はない。

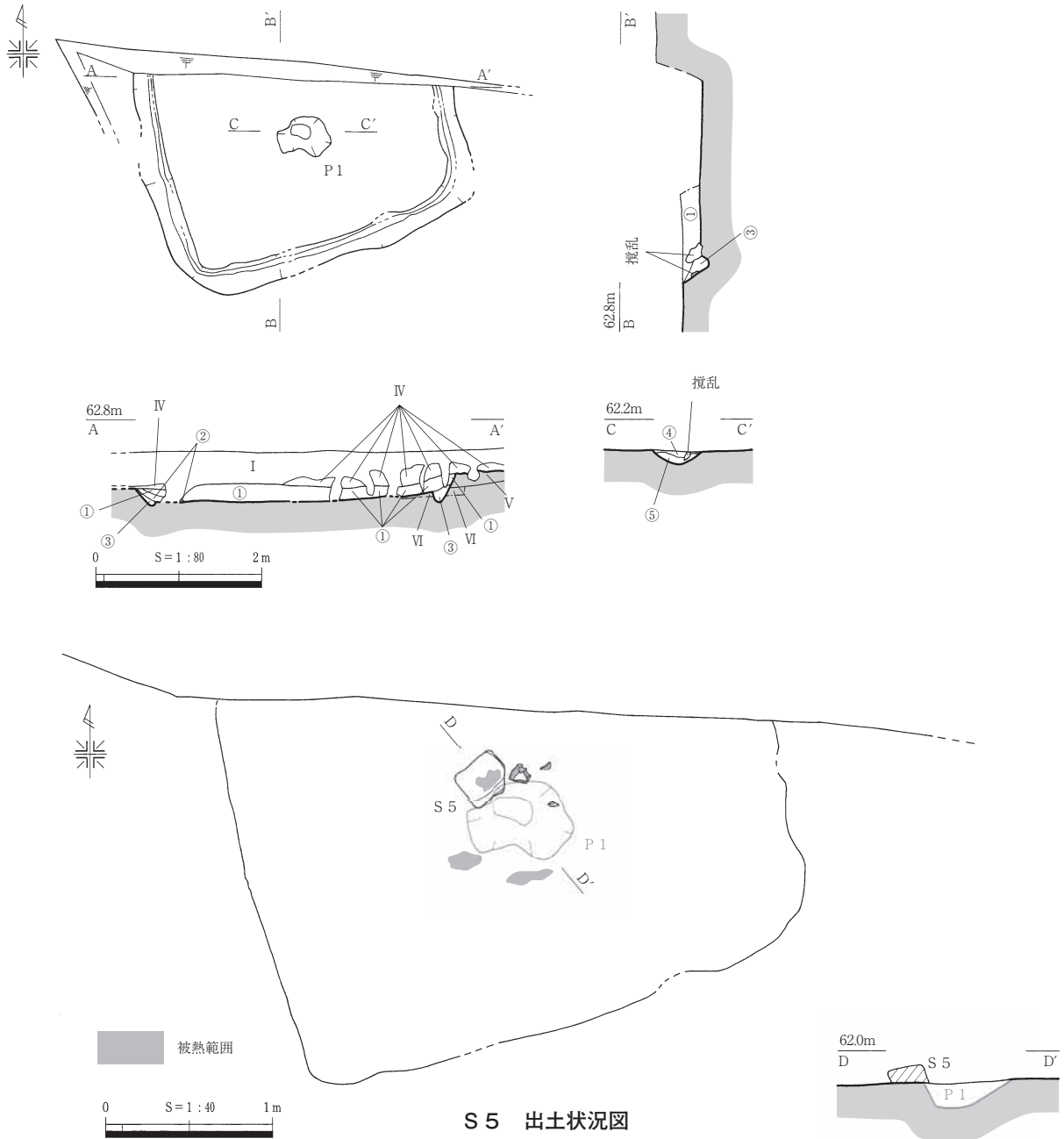
本遺構の廃絶時期は、①層出土土器の年代観より古墳時代前期前葉と判断した。

SI5 (第22～24図、巻頭図版2、PL.16～20、表4)

D2グリッド、丘陵平坦面に位置する。IV層除去後、V層上面で検出した。検出面の標高は62.60mである。本遺構東側は調査地外となり、今回の調査では遺構全体の1/2程度を対象とした。遺構東側については、今後調査が行われる予定となっており、今回の調査では床面検出までにとどめた。

平面形は方形を呈す。検出面での規模は、長辺4.60m、短辺3.80m、検出面からの深さは0.60mを測る。埋土は①～③層が黒褐色系、④層下は黄褐色系の色調をなす。いずれも、遺構周囲からの流入土とみられる。

検出した床面施設は、P1・2、周壁溝である。主柱穴はP1・2であり、床面中央部で検出した。平面形は円形を呈す。その規模は、P1は長軸37cm、短軸28cm、P2は長軸53cmである。P1-2の

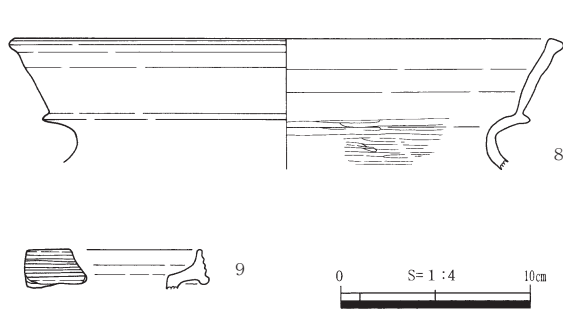


- ① 黒褐色土 10YR2/3 径1cm以下のローム粒少量含む。
径1mm以下の焼土少量含む。径1mm以下の炭化物少量含む。
粘性やや強い。
- ② 黒褐色土 10YR3/2 径1mm以下のローム粒少量含む。粘性やや強い。
- ③ 灰褐色土 7.5YR4/2 径1mm以下のローム粒含む。粘性やや強い。
- ④ 灰黄褐色土 10YR5/2 径1mm以下のローム粒多量に含む。径2mm以下の炭化物含む。
しまりとても強い。粘性やや強い。
- ⑤ にぶい黄橙色土 10YR7/4 径1cm以下のローム粒多量に含む。
径2mm以下の炭化物含む。しまりやや強い。粘性とても強い。

第19図 SI3

表3 SI3ピット計測表

ピット 番号	平面形	規模(cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
P1	円	60	49	11	

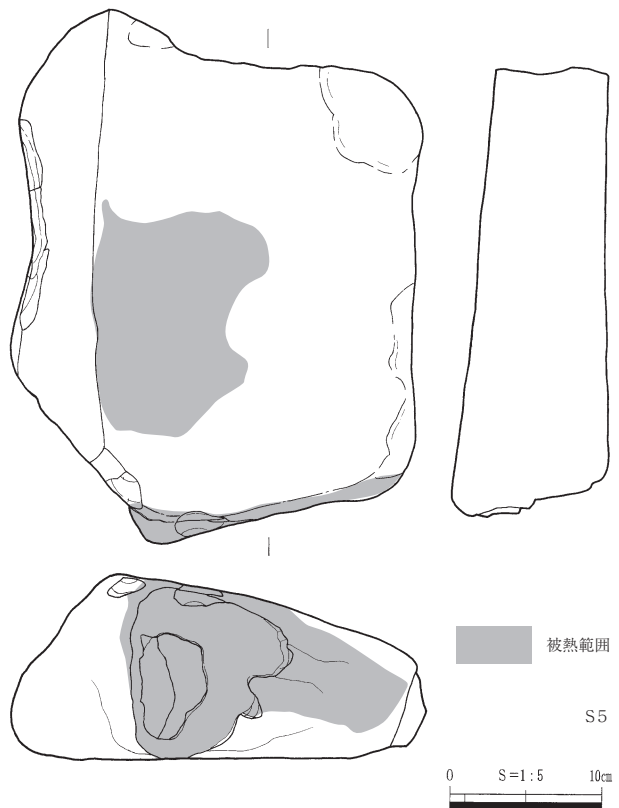


第20図 SI3出土遺物(1)

柱穴間距離は1.60mを測る。未調査部分を残すものの、SI5は2本柱の建物であると考ええる。

周壁溝は、床面壁際に検出し、幅は13cmである。今回検出した範囲においては、途切れることなく全周することを確認している。

床面中央、P1・2のほぼ中間点では、炭化物層を検出した。長軸77cm、短軸55cmの範囲に薄く堆積する。炉跡などの可能性が考えられるが、検出にとどめたため、下部構造の有無など、詳細は不明である。



第21図 SI3出土遺物(2)

出土遺物は①～⑤層から出土したものを図化した。遺物は弥生土器の混入がみられるものの、主体となるのは古墳時代前期の遺物である。特に④層からの出土が顕著であり、④層出土遺物は遺構埋没過程において生じた凹地に廃棄されたものと考ええる。床面直上およびP2上面では、土師器とみられる破片が出土しているが、小片のため図化していない。

10・11は⑤層から出土した。10は土師器の小型壺である。口縁部外面ナデ、胴部ハケ、内面はナデにより調整される。古墳時代前期に比定されるものである。11は器台の受部である。口縁端部外面はハケ調整したのちナデ、以下の外面にはハケ調整の痕跡が認められる。

12、14～20は④層から出土した。12は甕の口縁部～肩部である。胴部内面のケズリが頸部までなされており、厚ぼったい印象を受ける。古墳時代前期のものである。14～17は甕の口縁部である。21は坏である。外面は丁寧なナデが施される。18・19は低脚坏である。19は外面にはナデで調整されるが、ハケ調整の痕跡が残存する。古墳時代前期に比定される。20は弥生土器壺あるいは甕の底部である。外面には赤彩が施される。

21・22は⑤層から出土した。21は壺口縁部である。口縁帯には凹線文が施される。口縁部内面には凹線文を施した後に、波状文が施文される。22は高坏の柱状部である。柱状部は上半から緩やかに開く。脚部内面はケズリが施される。外面には平行沈線が2段施される。

13・23は、黒褐色系の色調をなす①～③層から出土した。13は甕の口縁部である。口縁は屈曲が鈍く厚みがある。23は弥生土器の高坏である。脚柱状部が緩やかに開く。外面はハケ調整後に凹線文が施される。弥生時代中期後葉に比定される。

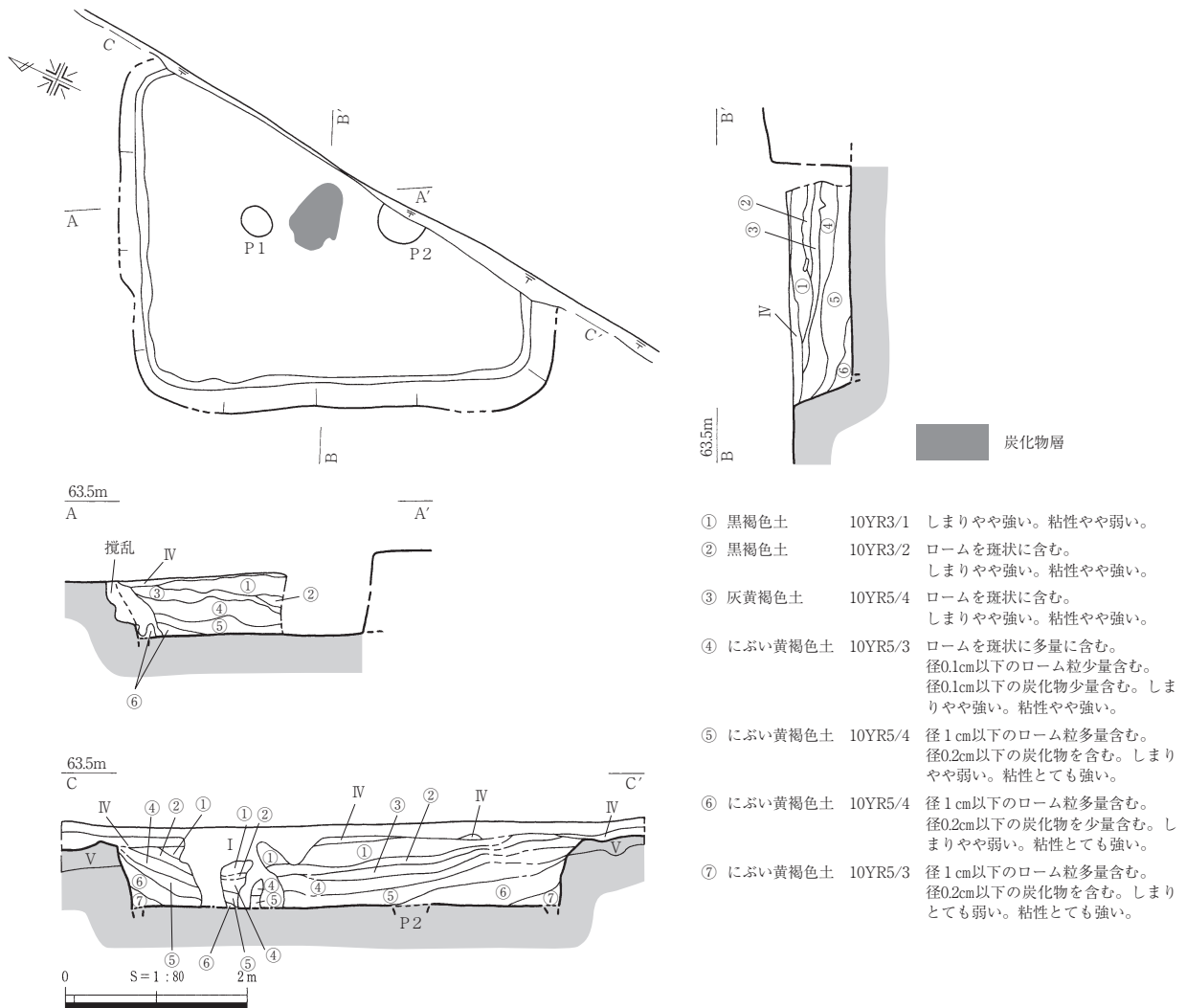
また、埋土の③～⑥層からは、7点の鉄器が出土した。下層の埋土はサンプリングした後ふるいに

かけ、精査、確認を行ったが、鉄片などの鉄関連遺物は採取していない。

⑥層からはF 5～8が出土した。ほぼ同位置に集中して出土した。F 5は無茎の鉄鏃である。穿孔は認められない。F 7は袋状鉄斧である。袋部に折り返しはない。刃部の横断面が湾曲し、特徴的な形態をなす。F 6は不明板状品、F 8は不明棒状品である。

⑤層からは不明板状品F 9、④層からは不明棒状品F 10が出土した。③層からは鉈F 11が出土した。F 11は長軸断面が反る形態をなす。

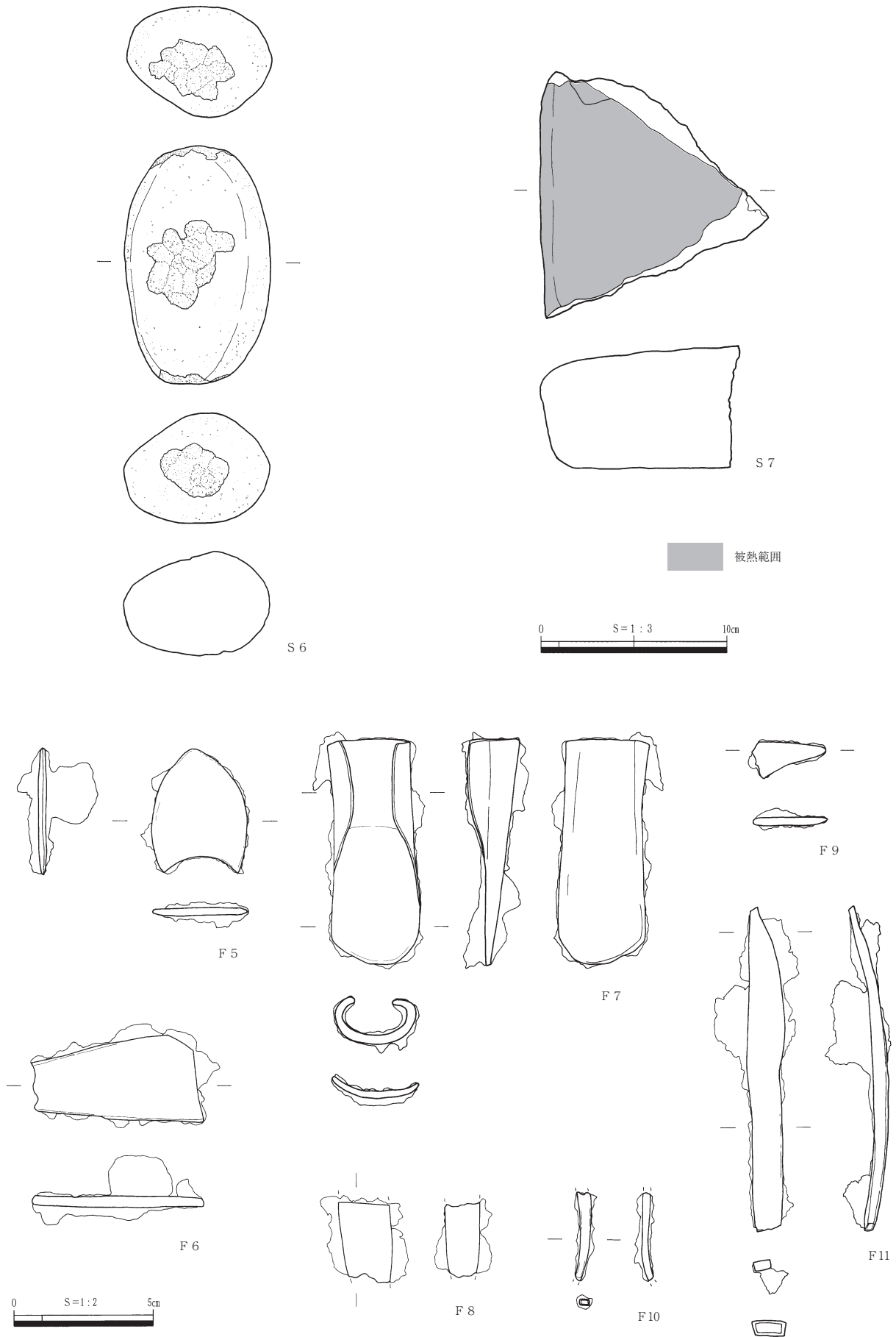
出土遺物の年代観から判断し、古墳時代前期中葉(天神川編年Ⅲ期)には、本遺構が廃絶されていたものと考えられる。



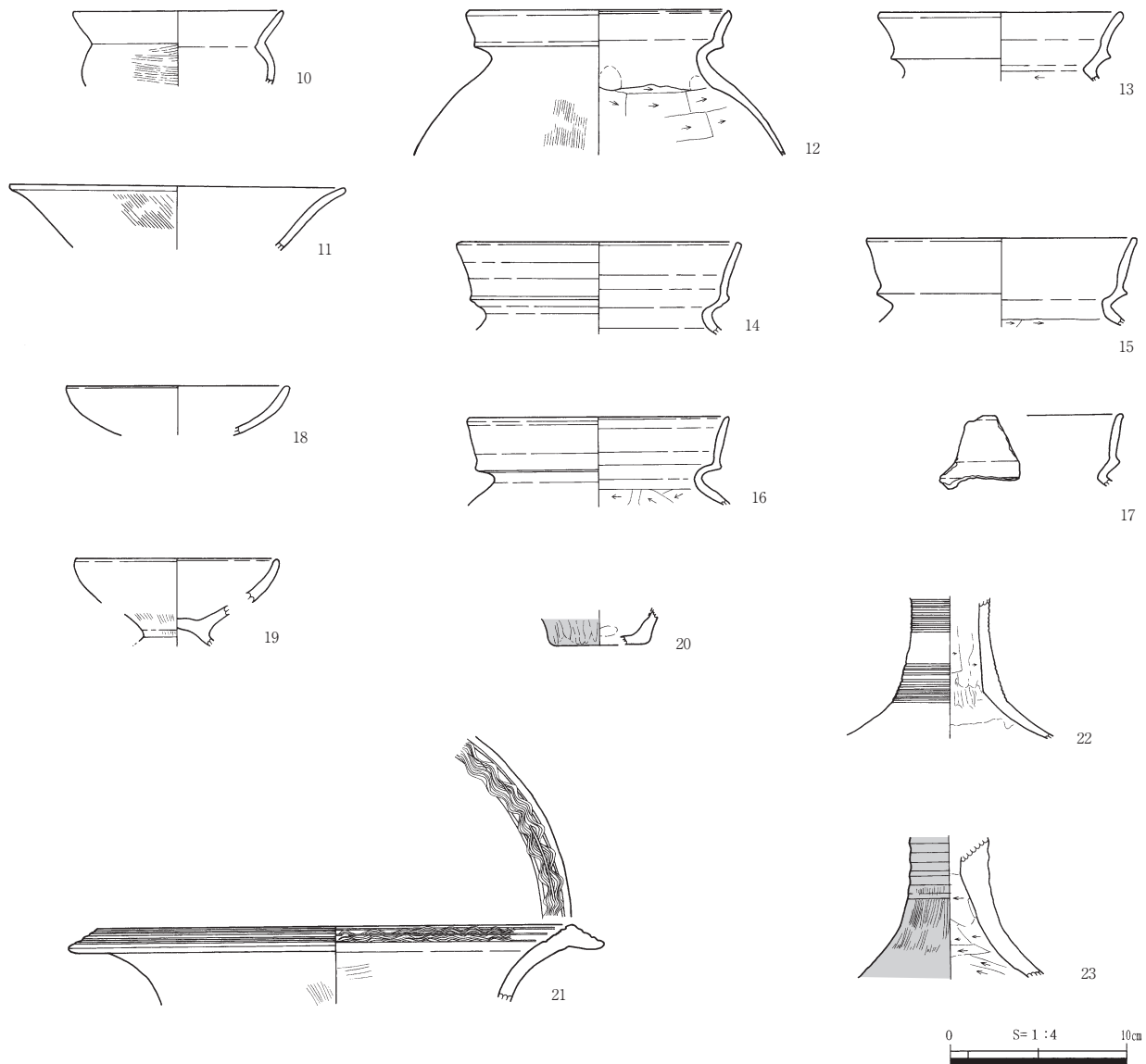
第22図 SI5

表4 SI5ピット計測表

ピット番号	平面形	規模(cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
P 1	円	37	28	—	
P 2	円	53	—	—	



第23図 SI5出土遺物(1)



第24図 SI5出土遺物(2)

3 掘立柱建物跡

SB1 (第25図、PL.21、表5)

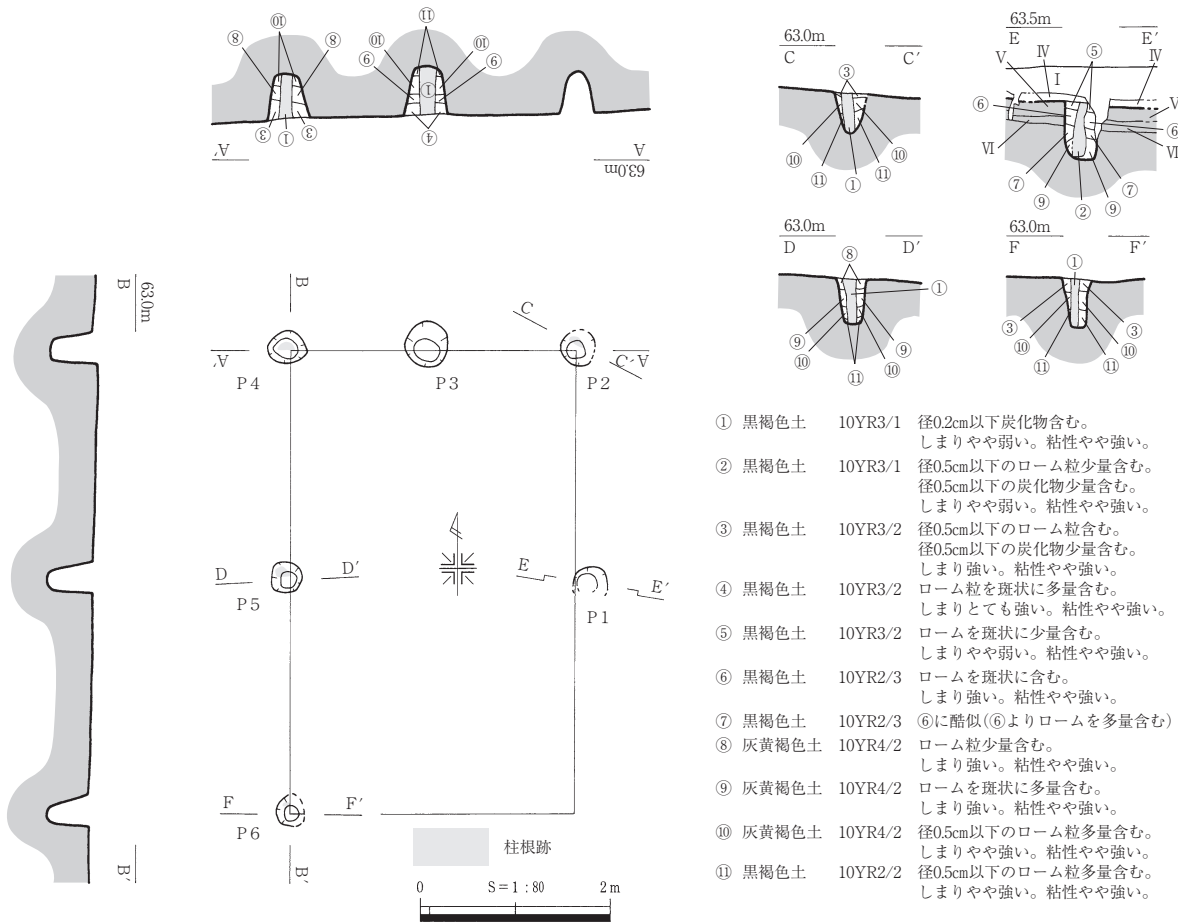
C・D 4グリッド、丘陵尾根頂部平坦面、標高62.60m付近に位置する。本遺構は、V層除去後、VI層上面で検出した。しかしながら、調査地際で検出したP 1の土層断面を観察した結果、遺構の立ち上がりがV層上面にまで及ぶことを確認した。したがって、V層上面から掘り込まれている遺構である。遺構南東隅は調査範囲外となる。

本建物は桁行2間(4.90m)、梁行2間(3.06m)の南北棟であり、主軸は、ほぼ座標の北を示す。全ての柱穴を検出していないが、桁梁に囲まれた範囲の面積は、14.99㎡と推定することができる。

柱掘方は円形で、柱穴の規模は長軸30～50cmを測り、検出面からの深さはP 1が57cm、P 2～6で37～50cmを測る。埋土は黒褐色土を主体とする。P 1の②層とP 2～6の①層は柱痕跡であり、しまりが弱い。それに対し、③～⑪層はしまりが強い。柱痕跡の径は、9～16cmである。

遺物はP 6の埋土中から弥生土器とみられる破片が出土したが、小片のため図化できない。

本遺構の帰属時期は遺構検出面から判断し、古墳時代以前と考える。



第25図 SB1

表5 SB1ピット計測表

ピット番号	平面形	規模(cm)			柱根跡(cm)	備考
		長軸	短軸	深さ		
P1	円	38	-	57	11	一部分のみ検出
P2	円	40	35	37	12	
P3	円	50	45	50	16	
P4	円	40	33	47	13	
P5	円	33	32	48	11	
P6	円	30	25	45	9	

4 土坑

SK4 (第26図、PL.22)

E4グリッド、丘陵北東向き緩斜面、標高61.60m付近に位置する。IV層除去後、V層上面で検出した。遺構の大部分は、今回の調査範囲の外となる。平面形は長楕円形を呈し、断面形は袋状

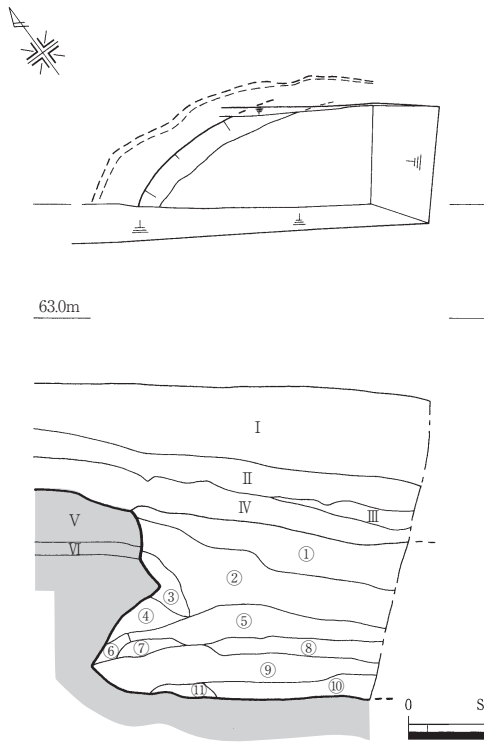
の形態をなす。検出した範囲内での規模は長軸1.20m、短軸0.50m、検出面からの深さは0.95mを測る。埋土は11層に分層できた。埋土は暗褐色土と黒褐色土を主体として堆積しており、③、⑥、⑦、⑪層はローム層を由来とする流入土である。遺構の形態的特徴から貯蔵穴と考える。遺物は出土していない。

遺構検出面から判断し、本遺構の帰属時期は古墳時代以前のものとする。

SK5 (第27図、PL.22)

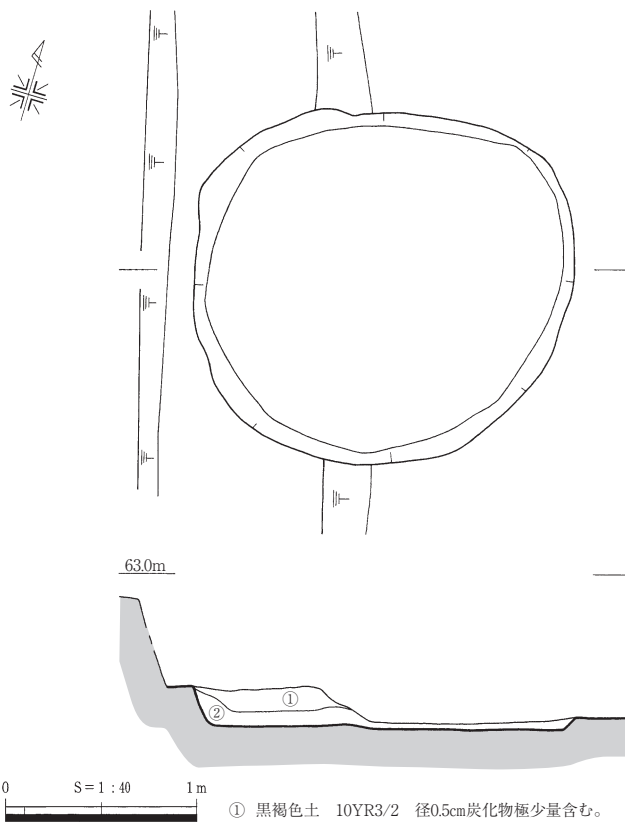
A4グリッド、丘陵尾根頂部平坦面、標高62.40m付近に位置する。I層除去後、V層上面で検出した。平面形は円形を呈す。検出面での規模は長軸2.00m、短軸1.90m、検出面からの深さは0.20mを測る。埋土は2層に分層でき、黒褐色土を主体とする。②層からは土師器とみられる破片が出土したが、小片のため図化していない。

検出面より判断し、本遺構の帰属時期は古墳時代以前のものとする。



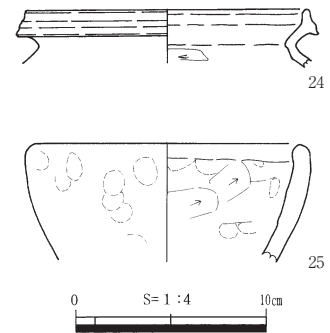
- ① 黒褐色土 10YR2/2 径0.2cm以下のローム粒含む。
しまりやや弱い。粘性やや強い。
- ② 暗褐色土 10YR3/3 径0.5cm以下のローム粒含む。
しまりやや弱い。粘性やや強い。
- ③ にぶい黄褐色土 10YR5/4 径1cm以上のローム粒多量含む。
しまりとても強い。粘性とても強い。
- ④ 黒褐色土 10YR3/2 径0.1cm以下のローム粒少量含む。
しまりやや弱い。粘性とても強い。
- ⑤ 黒褐色土 10YR2/2 径0.1cm以下のローム粒含む。
しまりやや強い。粘性やや強い。
- ⑥ にぶい黄褐色土 10YR4/3 径0.1cm以下のローム粒少量含む。
しまりやや強い。粘性とても強い。
- ⑦ にぶい黄褐色土 10YR4/3 径0.1cm以下のローム粒少量含む。
(⑥より多い)
しまりやや強い。粘性とても強い。
- ⑧ 暗褐色土 10YR3/3 径0.2cm以下のローム粒含む。
しまりやや強い。粘性やや強い。
- ⑨ 黒褐色土 10YR2/2 径0.5cm以下のローム粒含む。
しまりとても強い。粘性とても強い。
- ⑩ 暗褐色土 10YR3/3 径0.5cm以下のローム粒多量含む。
しまりとても強い。粘性とても強い。
- ⑪ にぶい黄褐色土 10YR5/4 しまりやや弱い。粘性とても強い。

第26図 SK4



- ① 黒褐色土 10YR3/2 径0.5cm炭化物極少量含む。
しまりやや強い。
- ② 黒褐色土 10YR3/1 径1cm以下のローム粒含む。
径0.5cm以下の炭化物少量含む。

第27図 SK5



第28図 IV層出土遺物

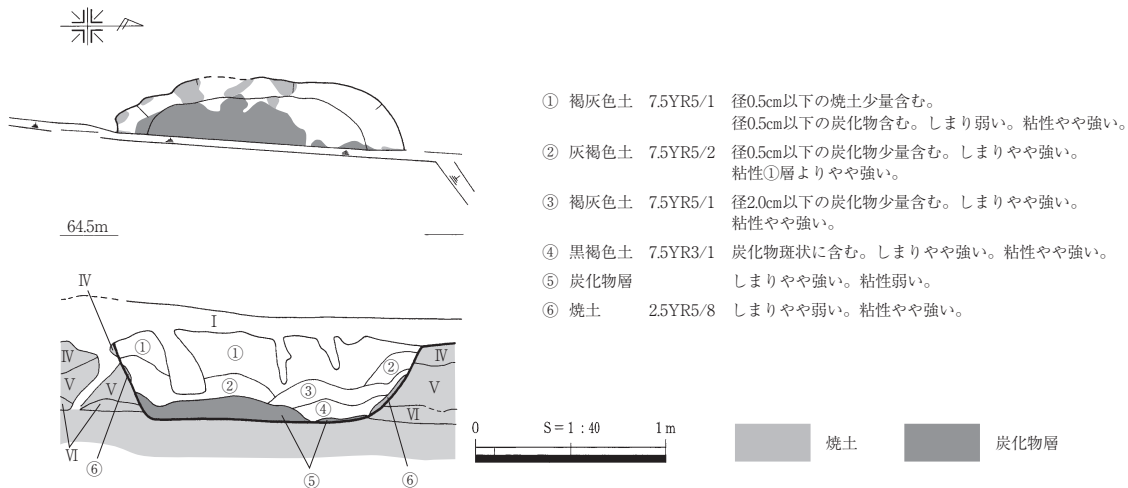
5 IV層出土土器(第28図、PL.23)

本項では、調査地北東側を中心に堆積する、IV層より出土した遺物を掲載する。24は弥生土器の甕の口縁部である。口縁帯は上下に肥厚し、凹線文が施される。口縁部の肩部内面にはケズリにより調整が施されるが、ケズリの範囲が頸部までは及んでいない。弥生時代中期後葉の時期に比定される。土師器25は底部が欠損して全形が明らかでないが、鉢ないし椀状のものを意図して作られている。内面は成形時の指頭の痕跡と、その後にケズリの痕跡が見られる。外面は指頭の痕跡とその後口縁端部にヨコナデによる器面調整が施されている。形態から古墳時代後期の鉢状の土器に類似すると考えられる。

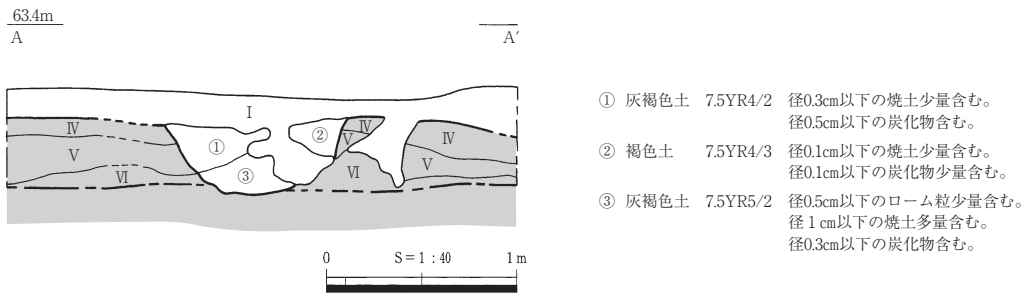
第6節 古代以降の調査

1 概要

調査地平坦面に、表土直下、IV層上面を検出面とする土坑2基(SK6・7)を検出した。いずれも埋土に焼土及び、炭化物を含み、類似性が認められる。製炭土坑とみられるSK6の出土炭化材を放射性炭素年代測定を行った結果、近世以降の遺構と考えられる。



第29図 SK6



第30図 SK7土層断面図

2 土坑

SK6 (第29図、PL.23)

C5グリッド、丘陵の尾根頂部平坦面、標高62.80m付近に位置する。IV層除去後、V層上面で検出したが、調査地際の壁面の土層観察によって立ち上がりをIV層上面まで確認した。平面形は楕円形で、長軸1.40m、短軸0.30m、検出面からの深さは0.40mを測る。埋土上位は褐灰色土及び灰褐色土が堆積し、炭化物を含む。遺構底面には炭化物層(⑤層)の堆積がみられ、⑤層の上位では比較的形状の明確な炭化材がまとまって出土した。下位の炭化物は形状が明確ではなく、層状をなす。土坑の壁面では焼土(⑥層)を検出した。遺構の底面には、焼土は検出していない。遺構の底面は還元焰状態であった可能性が高い。検出した焼土は遺構の壁面となるV層が被熱し赤色化した土と考えられる。これら炭化材の出土状況や焼土の検出状況から判断し、本遺構は製炭土坑と考える。

なお、出土した炭化材のうち、⑤層出土の2点について自然科学分析を行った。分析の結果、近世以降の年代を示す値(2 σ 歴年代範囲：AD1799～1892年ほか)を得た(第3章第9節)。

自然科学分析の成果から判断し、本遺構は近世以降に帰属するものと考えられる。

SK7 (第30図、PL.23)

D3グリッド、丘陵の尾根頂部平坦面、標高62.90m付近に位置する。調査地東壁断面で遺構とみられる落ち込みを確認した。平面的な検出はできなかったものの、土層断面の観察により、I層下のIV層上面が遺構の検出面となることを確認した。遺構東側については調査地外である。埋土は灰褐色土を主体となし、焼土及び炭化物を包含する。

本遺構の帰属時期は、出土遺物もなく、表土直下の検出のため不明である。しかしながら、検出面を等しくするSK6は、埋土が近似し、遺構の規模も類似するとみられることから、比較的近い時期の遺構である可能性がある。

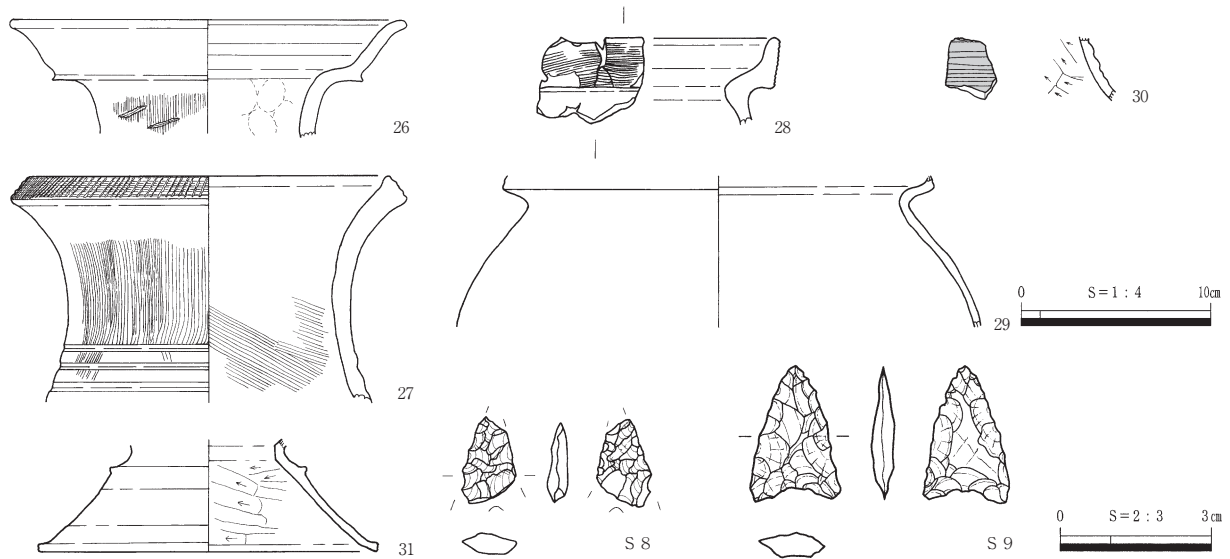
第7節 調査地内出土遺物 (第31図、PL.23)

調査地内からは、表土(I層)及び攪乱土から、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物が出土している。本節では、これらの遺物について報告する。

26は壺である。頸部は太く口縁部は複合口縁になり、口縁端部は外反する。外面はハケ調整がなされ、板状工具による刺突文を巡らせる。口縁部内外面はヨコナデで調整される。口縁部の形態から古墳時代前期前葉の時期に比定される。27は壺である。頸部の屈曲がゆるく、口縁部へゆるやかに広がる。内外面はハケ調整がなされ肩部外面には凹線文が少なくとも3条施される。口縁端部は凹線文を施したあと、板状工具によるキザミが施される。弥生時代中期後葉に比定されるものである。28は甕の口縁部である。口縁帯は幅が狭く、平行沈線がめぐる。文様の特徴から弥生時代後期後葉に比定される。29はD2グリッド、攪乱土出土の甕の肩部から口縁部である。肩部から胴部が張り出す器形である。口縁部は急角度で屈曲する。口縁帯は欠損するが、もともと広くない形状とみられる。凹線文を1条確認できる。器形の特徴から弥生時代中期後葉に比定される。30は高坏脚部の小片である。外面には2条以上の凹線文と赤色塗彩が施される。内面はケズリにより調整される。31は器台の脚部である。外面はナデ、内面はヘラケズリによって仕上げられる。形態から古墳時代前期に帰属すると考えられる。

第3章 倉谷荒田遺跡の調査

S 8は黒曜石製の石鏃である。先端が欠損する。基部は欠けるが、破面には風化がみられるため古い欠損と考えられる。形態は凹基式である。S 9は安山岩製の石鏃である。形態は凹基式である。



第31図 表土及び攪乱土出土遺物

第8節 遺物観察表（表6～9）

表6 土器観察表(1)

遺物番号	取り上げ番号	遺構地区層位名	挿図PL	種類器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	135	SI 4 床面直上	第14図 PL 8	弥生土器 甕	器高8.2△	外面頸部貼付突帯後ナデ。胴部上部ハケ。胴部下部ハケ後ミガキ。内面頸部ナデ。頸部以下、風化のため調整不明。	密	良	外面浅黄橙色 内面にぶい黄橙色	
2	96	SI 4 ②層	第17図 PL 8	弥生土器 甕	器高3.0△	外面頸部貼付突帯後キザミ。胴部ハケ。内面頸部以下ナデ。	密 (1mm以下の石英・長石多量に含む)	良	内外面橙色	
3	33	SI 4 埋土	第18図 PL 8	弥生土器 無頸壺	器高1.9△	外面口縁部3条凹線。赤色塗彩。内面ナデ。	密	良	外面赤色 内面淡黄色	
4	100	SI 4 ①層	第18図 PL 8	弥生土器 甕	口径13.4※ 器高7.8△	外面口縁端面4条凹線。口縁部～頸部ナデ。頸部以下ハケ。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ後ナデ。	密	良	内外面浅黄橙色	
5	85～87	SI 4 ①層	第18図 PL 8	土師器 壺または甕	底径0.8※ 器高3.7△	内外面ナデ。	やや粗	良	外面黄橙色 内面にぶい黄橙色	
6	82	SI 4 ①層	第18図 PL 8	弥生土器 壺または甕	底径4.3※ 器高2.1△	外面底部ミガキ。底面ナデ。内面ケズリ。	密 (長石・砂粒多量に含む)	良	外面黒褐色 内面橙色	
7	76	SI 4 ①層	第18図 PL 8	弥生土器 壺または甕	底径9.0※ 器高10.3△	外面ハケ後ミガキ。内面風化のため調整不明。	密	良	内外面にぶい黄橙色	
8	14	SI 3 ①層	第20図 PL15	土師器 甕	口径27.8※ 器高6.8△	外面ナデ。外面口縁部ナデ。頸部ミガキ。外面口縁端面4条凹線。口縁部ナデ。内面口縁部ナデ。	密 (微砂粒含む)	良	内外面淡黄色	
9	18	SI 3 ①層	第20図 PL15	弥生土器 甕	器高2.0△	外面口縁部ナデ。内面口縁部ナデ。	密	良	内外面明黄褐色	
10	503	SI 5 ⑤層	第24図 -	土師器 壺	口径10.8※ 器高4.0△	外面口縁部ナデ。頸部以下ハケ。内面ナデ。	密	良	内外面橙色	
11	517	SI 5 ⑤層	第24図 -	土師器 器台	口径19.0※ 器高3.6△	外面口縁部ハケ後ナデ。受部ハケ。内面ナデ。	密	良	外面浅黄橙色 内面にぶい黄橙色	
12	462	SI 5 ④層	第24図 -	土師器 甕	口径14.8※ 器高8.2△	外面口縁部～頸部ナデ。胴部ハケ。内面口縁部～頸部ナデ。頸部指押さえ。胴部ケズリ。	密	良	内外面にぶい黄橙色	

表7 土器観察表(2)

遺物番号	取り上げ番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13	368	SI 5 ①~③層	第24図 -	土師器 甕	口径13.8※ 器高3.9△	外面ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	内外面浅黄橙色	
14	407	SI 5 ④層	第24図 -	土師器 甕	口径15.8※ 器高5.3△	外面ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	内外面黄橙色	
15	355	SI 5 ④層	第24図 -	土師器 甕	口径14.8※ 器高4.9△	外面ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	外面にぶい黄橙色 内面黄橙色	
16	402-2	SI 5 ④層	第24図 -	土師器 甕	口径14.8※ 器高5.1△	外面ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	外面にぶい黄橙色 内面黄橙色	
17	369	SI 5 ④層	第24図 -	土師器 甕	器高4.1△	内外面ナデ。	やや粗	良	内外面浅黄橙色	
18	226・333	SI 5 ④層	第24図 -	土師器 低脚坏	口径12.2※ 器高2.8△	外面坏部ナデ。 内面坏部丁寧ナデ。	密	良	外面浅黄褐色 内面明黄褐色	
19	476	SI 5 ④層	第24図 -	土師器 低脚坏	口径11.4※ 底径4.0※ 器高2.3△	外面坏部上位ナデ。坏部下位~脚 部ハケ後ナデ。 内面坏部上位ナデ。坏部下位~脚 部ケズリ後ナデ。	やや粗	良	内外面黄褐色	
20	348	SI 5 ④層	第24図 -	弥生土器 壺または甕	底径5.0※ 器高2.0△	外面底部ミガキ。底面ナデ。赤色 塗彩。 内面底部ナデ。指押さえ。	密	良	外面明黄褐~淡赤橙 ~赤色 内面浅黄橙~にぶい 黄褐色	
21	501	SI 5 ⑤層	第24図 -	弥生土器 壺	口径36.8※ 器高4.4△	外面口縁端面4条凹線。口縁部ナ デ。頸部ハケ。 内部口縁部3条凹線の後、波状文。 頸部ハケ後ナデ。	密	良	内外面浅黄色	
22	422	SI 5 ⑤層	第24図 -	弥生土器 高坏	器高8.0△	外面9条の平行沈線、8条の平行沈 線。 内面脚部上位ケズリ。下位ナデ。	密	良	外面にぶい黄褐色 内面浅黄色	
23	327	SI 5 ①~③層	第24図 -	弥生土器 高坏	器高8.0△	外面脚部ハケ後4条凹線。赤色塗 彩。 内面脚部上位ケズリ後ナデ。下位 ケズリ。	密	良	外面浅黄~赤色 内面浅黄色	
24	481	D 3 IV層	第28図 PL23	弥生土器 甕	口径14.8※ 器高3.1△	外面口縁端面2条凹線。頸部ナ デ。頸部ハケ。	やや粗	良	内外面明黄褐色	
25	238	A 4 IV層	第28図 PL23	土師器 鉢	口径14.0※ 器高6.0△	外面ナデ、指押さえ。 内面ケズリ後ナデ、指押さえ。	密	良	内外面にぶい黄褐色	
26	377	A 1 I層 (表土)	第31図 PL23	土師器 壺	口径20.5※ 器高6.4△	外面口縁部ナデ。頸部ハケ後刺突 文。 内面口縁部ナデ。頸部ナデ、指押 さえ。	密 (0.5~1.0mm砂 粒含む)	良	内外面にぶい黄褐色	
27	210・537	C 5 攪乱土	第31図 PL23	弥生土器 壺	口径19.0※ 器高12.2△	外面口縁部4条凹線後キザミ。頸 部ハケ後3条凹線。 内面口縁部ナデ。頸部ハケ。	密	良	内外面橙色	
28	285	C 3 攪乱土	第31図 PL23	弥生土器 甕	器高4.5△	外面口縁部平行沈線。頸部ナ デ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	内外面にぶい黄褐色	
29	278	D 2 攪乱土	第31図 -	弥生土器 甕	器高7.9△	外面口縁部1条凹線。胴部ナ デ。 内面ナデ。	やや粗	やや良	内外面浅黄橙色	
30	188	C 4 攪乱土	第31図 PL23	弥生土器 高坏	器高3.2△	外面脚部2条以上(不明瞭)凹線。 赤色塗彩。 内面ケズリ。	密	良	外面赤褐色 内面黄褐色	
31	539	A 1 攪乱土	第31図 PL23	土師器 器台	底径17.6※ 器高4.9△	外面脚部ナデ。 内面くびれ部ナデ。脚部ケズリ。 底部端部ナデ。	密	良	内外面浅黄橙色	

表8 石器観察表

遺物番号	取り上げ番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S 1	151	SI 4 P 1 ⑤層	第15図 PL. 8	磨石	安山岩	8.2	5.1	7.6	514.5	磨面あり。
S 2	91	SI 4 ③層	第16図 PL. 8	石鏃	安山岩	1.8	1.2	0.3	0.8	平基式五角形鏃。先端古欠。
S 3	49	SI 4 ④層	第17図 -	砥石	細粒花崗岩	6.3△	4.9△	3.2	152.5	表裏面および側面に極細の砥面あり。砥面には無数の擦痕あり。一部、傷痕あり。
S 4	78	SI 4 ①層	第18図 PL. 8	磨石	凝灰角礫岩	7.3	7.0	5.7	369	磨面あり。
S 5	496~499	SI 3 床面直上	第21図 PL. 14	台石	安山岩	35.1	26.9	12.05	15550	被熱赤化する。
S 6	523	SI 5 床面直上	第23図 -	敲石	安山岩	12.7	7.9	5.5	642.9	敲打面あり。
S 7	405	SI 5 ④層	第23図 -	台石	安山岩	13.1	12.2	6.5	1260	被熱赤化する。
S 8	22	D 2 I層 (表土)	第31図 -	石鏃	安山岩	2.7	1.8	0.5	1.6	凹基式
S 9	30	B 3 I層 (表土)	第31図 -	石鏃	黒曜石	1.7△	1.1△	0.4	0.6	基部古欠、先端欠損あり。凹基式。

表9 鉄器観察表

遺物番号	取り上げ番号	遺構・地区・層位名	挿図PL	器種	法量(cm)	形態・手法上の特徴	備考
F 1	131	SI 4 床面直上	第14図 PL.10	不明棒状品	残存長7.5cm 最大幅1.1cm 最大厚0.5cm 重量26.5 g	薄手の棒状品で基部は直線的で、断面方形。刃部が撥状に開く。刃部の先端は欠損する。鏝の身部か。	
F 2	130	SI 4 ②層	第17図 PL.10	不明板状品	残存長6.4cm 最大幅3.1cm 最大厚0.4cm 重量31.5 g	基部は欠損する。基部から刃部にかけてハの字に開き、右側部に面がある。板状の形態をなす。	
F 3	73	SI 4 ①層	第18図 PL.10～ 12	鑄造鉄斧	残存長8.8cm 最大幅7.7cm 最大厚3.2cm 重量361.0 g	袋部は長方形。刃部幅は基部幅よりひろく、刃部が広がる形状。刃部先端は欠損する。合わせ目に鑄バリが残る。	
F 4	129	SI 4 ①層	第18図 PL.10	不明板状品	残存長6.9cm 最大幅2.2cm 最大厚0.4cm 重量22.9 g	基部は直線的で、刃部がやや広がる形状。刃部側は欠損する。	
F 5	425①	SI 5 ⑥層	第23図 PL.18	鉄鏃	残存長4.4cm 最大幅3.4cm 最大厚0.3cm 重量18.86 g	無茎の鉄鏃。完形。	
F 6	425②	SI 5 ⑥層	第23図 PL.18	不明板状品	残存長3.1cm 最大幅6.2cm 最大厚0.4cm 重量29.45 g	左側面が欠損する。	
F 7	421	SI 5 ⑥層	第23図 PL.18・ 19	袋状鉄斧	残存長8.1cm 最大幅3.1cm 最大厚1.8cm 重量49.37 g	完形の袋状鉄斧。基部幅と刃部幅がほぼ同じ。袋部の断面形状は楕円形になる。刃部の断面は湾曲する形状になる。	
F 8	426	SI 5 ⑥層	第23図 PL.18	不明棒状品	残存長2.9cm 最大幅1.8cm 最大厚1.7cm 重量16.98 g	厚手の棒状鉄製品。基部、先端部は欠損する。鏝の身部か。	
F 9	420	SI 5 ⑤層	第23図 PL.18	不明板状品	残存長1.3cm 最大幅1.7cm 最大厚0.3cm 重量2.05 g	板状の鉄製品。	
F 10	406	SI 5 ④層	第23図 PL.18	不明棒状品	残存長3.2cm 最大幅0.5cm 最大厚0.3cm 重量1.58 g	棒状の鉄製品。断面方形。上端部、下端部は欠損する。穿孔具か。	
F 11	461	SI 5 ③層	第23図 PL.18	鈍	残存長11.7cm 最大幅1.3cm 最大厚0.5cm 重量27.60 g	先端部及び、基部が欠損。基部縦断面がやや湾曲する。	

第9節 自然科学分析の成果

1 はじめに

当委託業務は、鳥取県埋蔵文化財センターが文化財調査コンサルタント(株)に委託して実施したものである。

倉谷荒田遺跡における分析項目とその目的は、以下に示すとおりである。

放射性炭素年代測定：弥生時代中期の竪穴住居跡1棟(SI4)、古墳時代前期の竪穴住居跡1棟(SI3)、時期不明の製炭土坑1基(SK6)の絶対年代を明らかにする。

2 分析試料について(表10、写真2)

分析試料はすべて鳥取県埋蔵文化財センターにより採取・保管されていた試料から、提供を受けたものである。

年代測定試料の概要を、表10の年代測定結果及び写真2の年代測定試料写真に示した。

3 測定方法及び結果(第32～37図)

(1) AMS年代測定方法

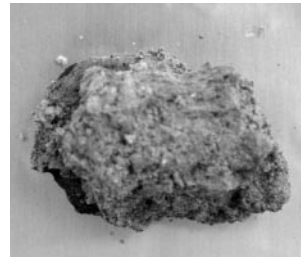
試料に酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した後、石墨(グラファイト)に調整し、加速器質量分析計(AMS)を用いて測定を行った。較正年代はINTCAL09を用いて、OxCal 4.1により算出した。



試料No. 1



試料No. 2



試料No. 3



試料No. 4



試料No. 5



試料No. 6

写真2 年代測定試料

(2) AMS年代測定結果

AMS年代測定結果を表10に示し、節末にOxCal 4.1による暦年較正図(第32～37図)を示す。

(3) AMS年代測定結果について

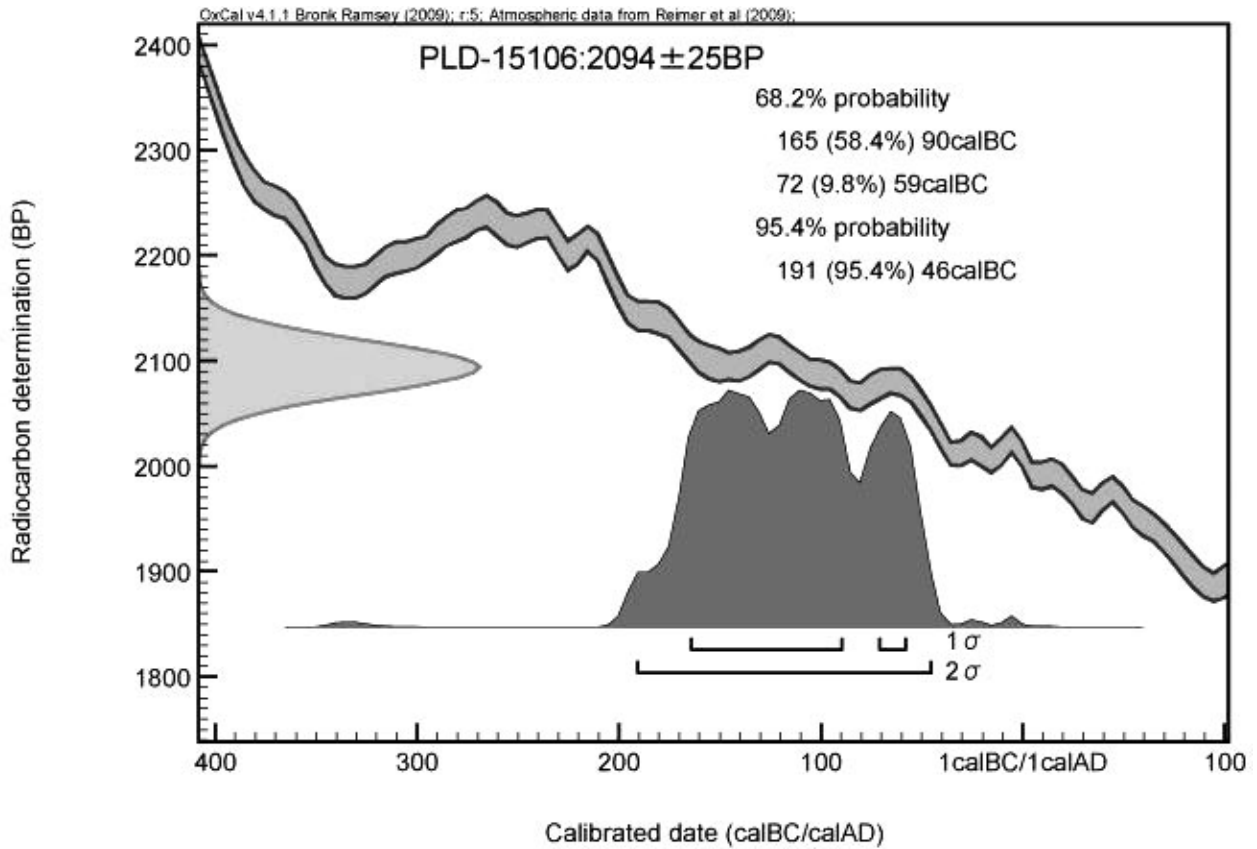
弥生時代中期の竪穴住居跡1棟(SI4)から得られた年代値は、弥生時代中期を示す物であり、出土遺物からの推定年代と一致した。

古墳時代前期の竪穴住居跡1棟(SI3)から得られた年代値は、弥生時代後期から古墳時代前期を示す物であった。やや古い年代が得られたが、較正曲線の精度から考えて、出土遺物からの推定年代をくつがえすものではない。

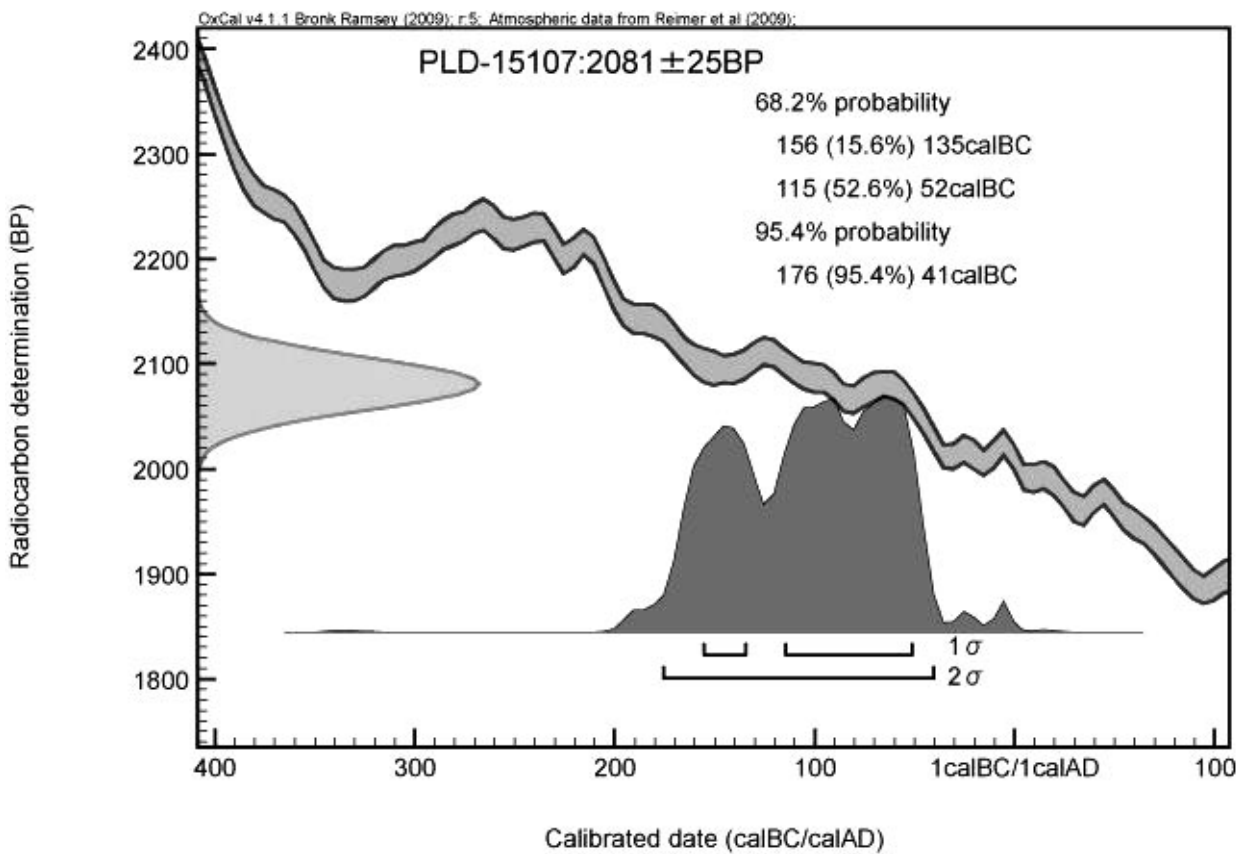
時期不明の製炭土坑1基(SK6)から得られた年代値は、江戸時代以降現代までのどこかを示すものであった。

表10 AMS年代測定結果

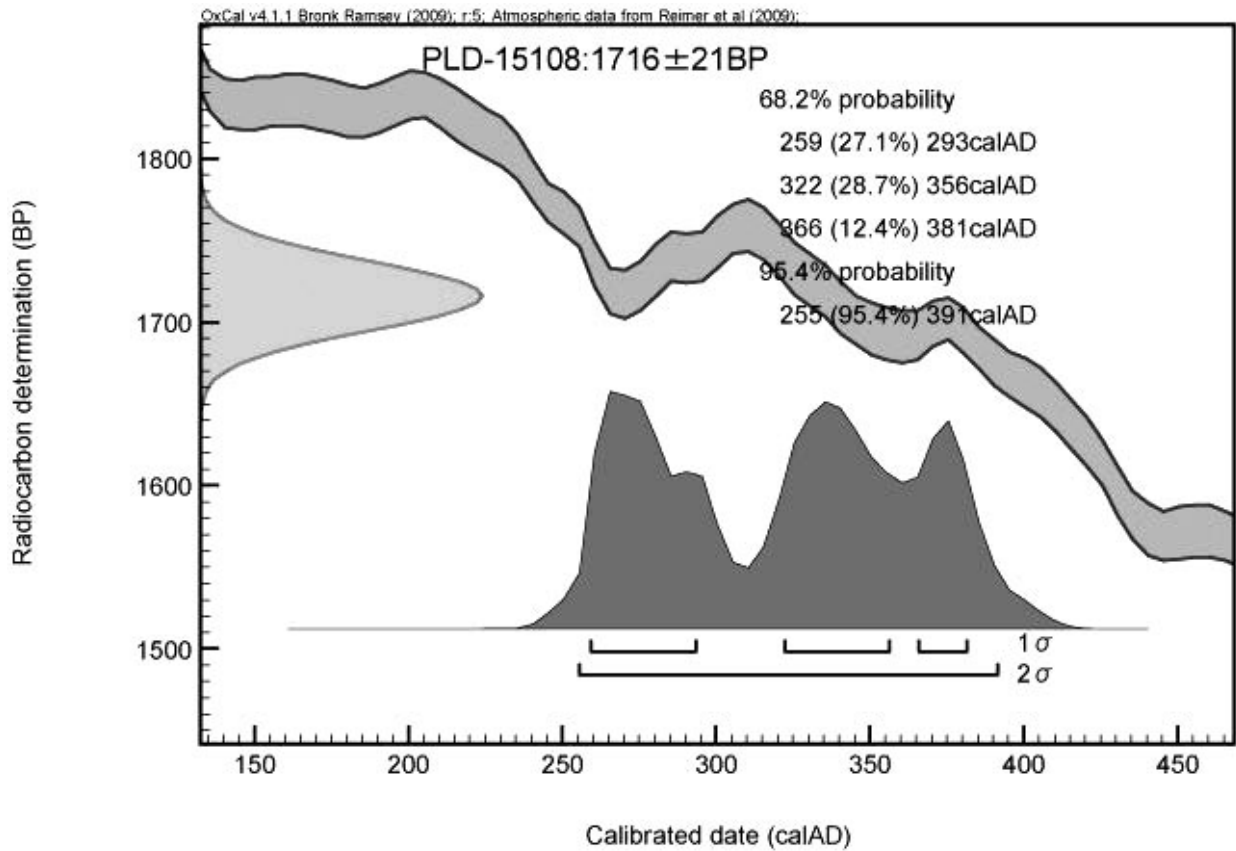
試料						重量 (g)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 $\delta^{13}\text{C}$ 補正無 (yrBP)	補正 ^{14}C (yrBP)	暦年較正用 年代 (yrBP)	暦年較正年代		測定 番号 (PLD-)
試料 No.	取上 No.	種別	出土遺構	出土層位	備考						1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
1	136	炭化材	SI 4	床面直上		0.985	-28.01 ± 0.34	2145 ± 25	2095 ± 25	2094 ± 25	BC165 - 90 (58.4%)	BC191 - 46 (95.4%)	15106
											BC72 - 59 (9.8%)		
2	152	炭化材	SI 4	P 1 ⑦層		0.619	-26.97 ± 0.31	2115 ± 25	2080 ± 25	2081 ± 25	BC156 - 135 (15.6%)	BC176 - 41 (95.4%)	15107
											BC115 - 52 (52.6%)		
3	203	炭化材	SI 3	床面直上		2.023	-26.26 ± 0.25	1735 ± 20	1715 ± 20	1716 ± 21	AD259 - 293 (27.1%)	AD255 - 391 (95.4%)	15108
											AD322 - 356 (28.7%)		
											AD366 - 381 (12.4%)		
4	204	炭化材	SI 3	床面直上		0.517	-24.03 ± 0.26	1765 ± 25	1780 ± 25	1781 ± 23	AD218 - 260 (41.9%)	AD137 - 264 (62.8%)	15109
											AD285 - 323 (26.3%)		
5	418	炭化材	SK 6	⑤層		2.115	-27.18 ± 0.25	170 ± 20	135 ± 20	133 ± 21	AD1682 - 1698 (11.0%)	AD1677 - 1765 (34.8%)	15110
											AD1723 - 1737 (8.6%)		
											AD1804 - 1816 (7.5%)		
											AD1834 - 1879 (28.0%)		
											AD1916 - 1936 (13.1%)		
6	459	炭化材	SK 6	⑤層		0.969	-29.01 ± 0.36	210 ± 20	145 ± 20	145 ± 21	AD1679 - 1695 (10.7%)	AD1668 - 1707 (16.0%)	15111
											AD1727 - 1765 (24.8%)		
											AD1773 - 1776 (1.5%)		
											AD1800 - 1813 (8.9%)		
											AD1839 - 1842 (1.4%)		
											AD1853 - 1867 (5.8%)		
AD1914 - 1945 (17.4%)													
											AD1918 - 1940 (15.2%)		



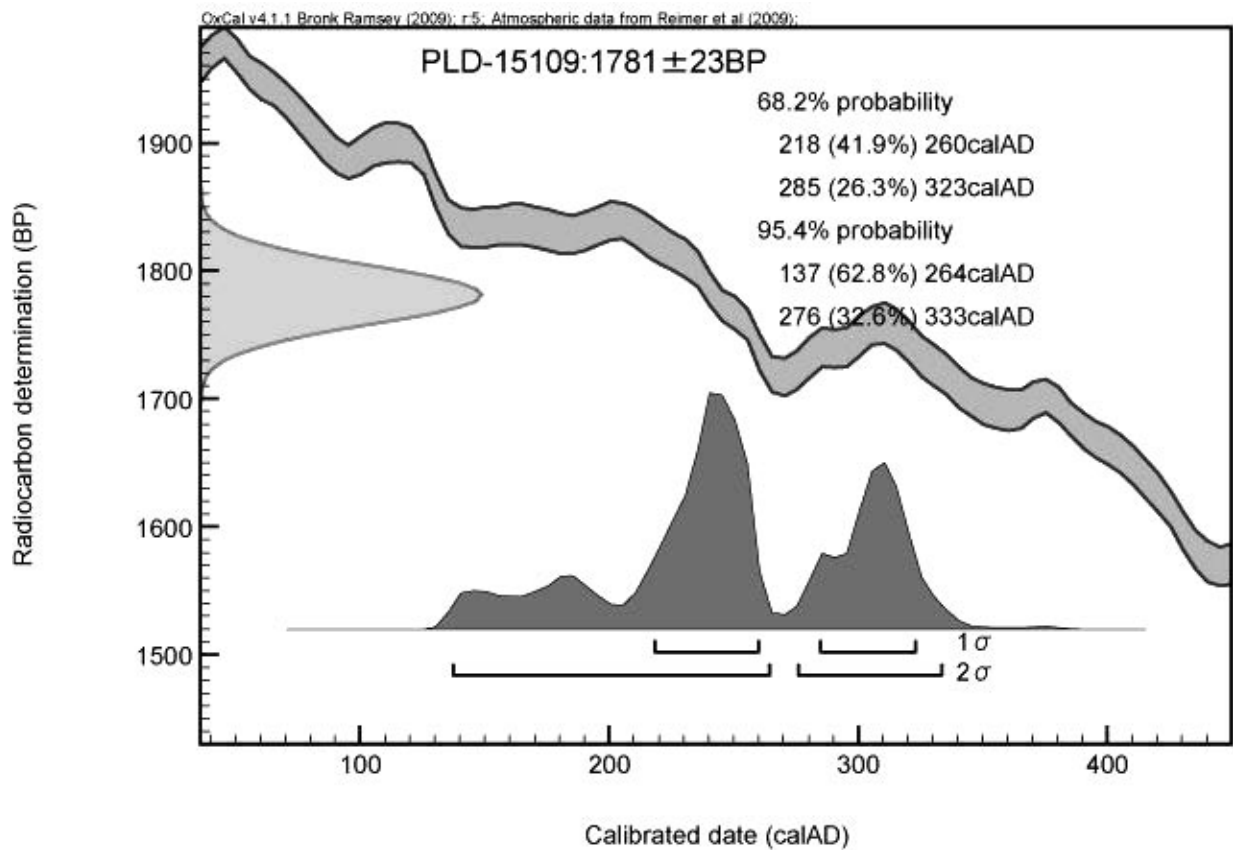
第32図 暦年較正図(OxCal4.1)：試料1



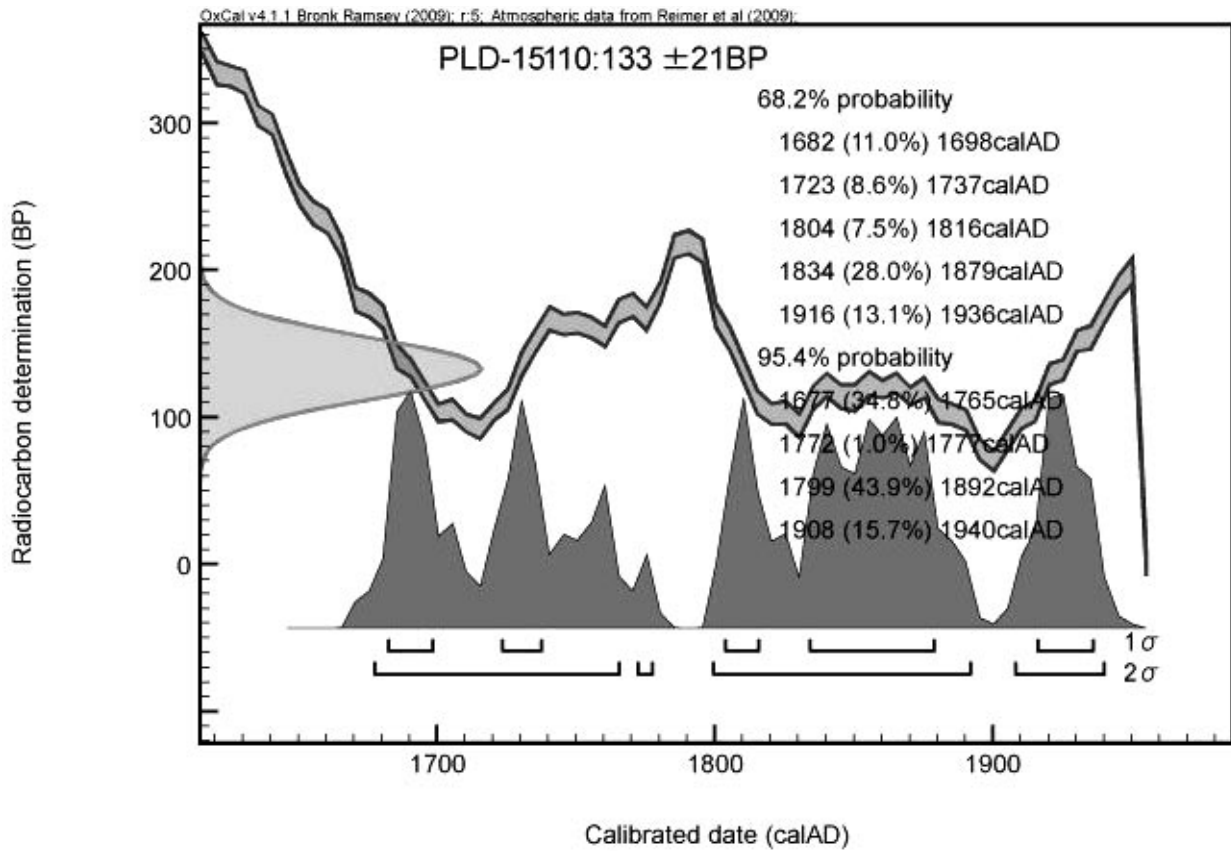
第33図 暦年較正図(OxCal4.1)：試料2



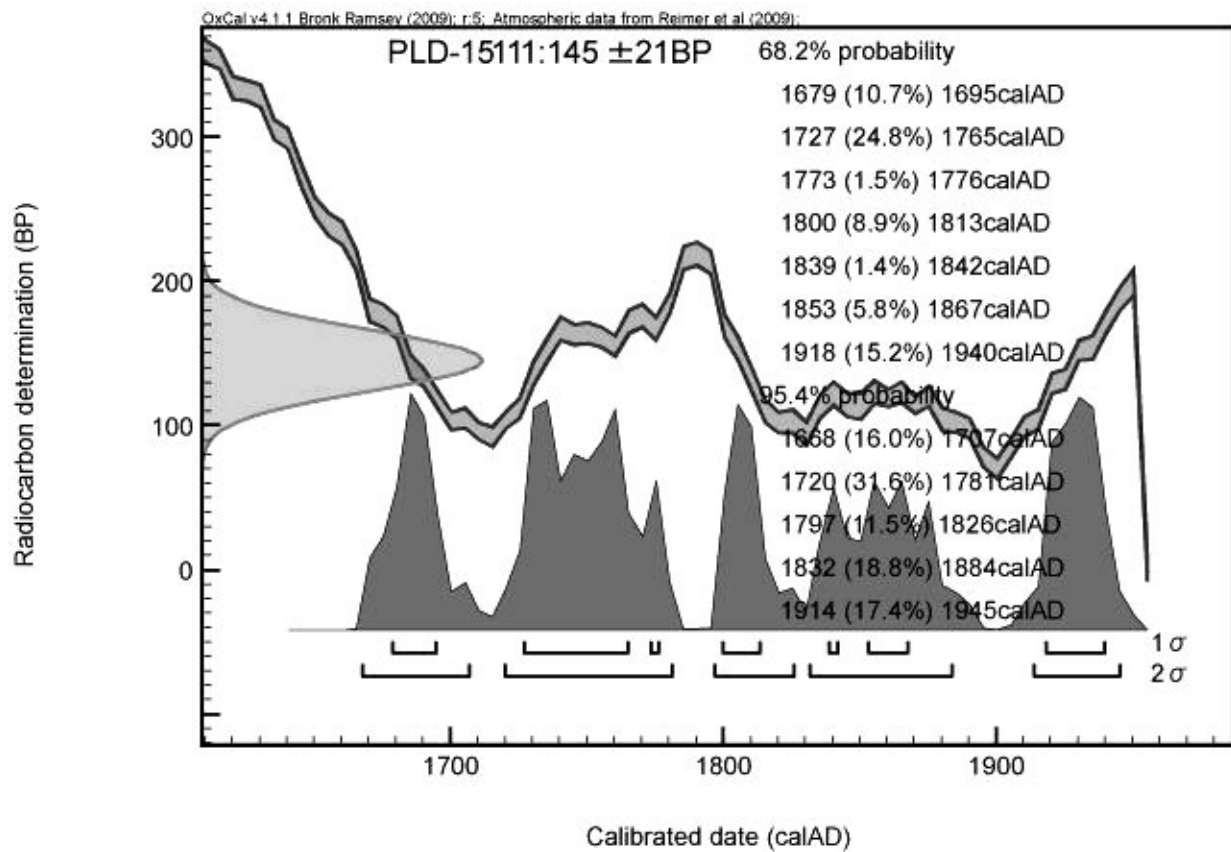
第34図 暦年較正図(OxCal4.1)：試料3



第35図 暦年較正図(OxCal4.1)：試料4



第36図 暦年較正図(OxCal4.1)：試料5



第37図 暦年較正図(OxCal4.1)：試料6

第10節 倉谷荒田遺跡の総括（表11）

倉谷荒田遺跡では調査の結果、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土坑7基を検出した。また、弥生土器、土師器などの土器のほか、石器、鉄器が出土した。ここでは、本遺跡の調査成果を時代毎に概観し、まとめとしたい。

1 まとめ

縄文時代

出土した遺物で時期決定できた遺構はないが、SK1～3は形態的特徴から落とし穴と判断し、当該期に帰属するものとした。本遺跡の落とし穴には、土坑底面にピットを有するもの(SK2・3)と、有さないもの(SK1)が存在する。これらの形態的な差異は、時期差を示す、あるいは捕獲する対象物による違い、落とし穴に仕掛ける罟の形状の違いなどを示す可能性がある。

弥生時代

弥生時代中期後葉に帰属する竪穴住居跡1棟(SI4)を検出した。SI4は、床面に中央ピットを検出したものの、柱穴は検出しておらず、特徴的な形態を示す遺構である。本遺構は、部分的な拡張を伴う建て替えが行われていることを確認していることから、遺構は短期間ではなく、一定期間の利用がなされていたものと考えている。

SI4からは、土器、石器、鉄器が出土した。鉄器は4点出土し、そのうち床面直上で出土した棒状鉄器F1は、同じ床面直上出土の土器の年代観から判断し、弥生時代中期後葉に帰属するものと考え

表11 鳥取県内における弥生時代中期の遺構内出土鉄器

遺跡名	所在地	遺構数	遺構名(出土点数)	合計出土点数	参考文献
青谷上寺地遺跡	鳥取市	2	SD27(3)	8	1
			SA26(5)		2
			竪穴住居跡2号(1)		
西高江遺跡	北栄町	2	竪穴住居跡8号(4)	5	3
笠見第3遺跡	琴浦町	3	SI147(1)	4	4
			SK20(2：内1点は鑄造鉄斧片)		
			SK24(1)		5
梅田萱峯遺跡	琴浦町・大山町	13	SK45(1)	18	6
			SI1(2)		7
			SI2(1)		
			SI4(1)		
			SS1(1)		
			SK4(1)		
			SI23(1)		
			SI25(2)		
			SI26(2)		
			SI37(1)		
			SK115(1)		
			SK119(1)		9
			SK171(1)		
SK166(2)					
押平尾無遺跡	大山町	1	竪穴住居3(1)	1	10
茶畑第1遺跡	大山町	2	竪穴住居1(2)	3	11
			竪穴住居8(1)		
茶畑山道遺跡	大山町	3	SI-01(1)	6	12
			SK-11(4)		
			SK-10(1)		
茶畑六反田遺跡	大山町	1	竪穴住居1(5)	5	13
妻木晩田遺跡	大山町・米子市	1	落ち込み2(1)	1	14
橋本漆原山遺跡	米子市	1	竪穴住居1(1)	1	15
越敷山遺跡群	南部町	1	SI-19(1)	1	16
貝田原遺跡	伯耆町	1	第1竪穴住居跡(1)	1	17
真野ブヤ原遺跡	伯耆町	1	SI-5・6・7・8(1)	1	18
長山馬籠遺跡	日野町	1	SI-01(4：内1点は鑄造鉄斧片)	4	19
合計		33		59	

る。本遺跡において出土した鉄器の最古例の資料であり、集落における鉄器導入時期を指し示すものである。

弥生時代中期の遺構内で出土した鉄器の例は、本資料F 1を除き、鳥取県では14遺跡・59点(表11)、島根県では4遺跡・18点が出土している。本資料は、山陰地方においての鉄器が普及しはじめる段階の1例となった。

今回の調査地においては、確実に弥生時代中期に帰属する遺構はSI 4のみであるが、包含層(IV層)から弥生時代中期の土器が出土しており、調査地周辺に弥生時代中期の遺構が存在する可能性は高い。

なお、SI 4埋土最上層(①層)からは、形態的特徴から弥生時代後期から古墳時代前期に帰属する鑄造鉄斧(F 3)が出土した。ほぼ完存する資料であり、遺存状態も良好である。ほぼ完存する鑄造鉄斧が出土する遺跡は、青谷上寺地遺跡、越敷山遺跡群など地域の拠点集落に限られ、本遺跡もその可能性は考えられよう。

また、調査地内より若干量ではあるものの、弥生時代後期後葉に比定される土器が出土した。遺跡西側に近接する倉谷西中田遺跡では、弥生時代後期後葉の竪穴住居跡を2棟調査しており、その内1棟は直径7.8mの大型のものである(1)。周辺地域の有力層の施設である可能性が高く、当遺跡の鑄造鉄斧出土との関連性も含め、注目される。

古墳時代

SI 3・5、SB 1、SK 4・5を検出した。しかしながら、明確に古墳時代に帰属すると判断できる遺構は、土師器が出土したSI 3・5、SK 5のみであり、残りの遺構については、古墳時代を遡る可能性も残る。

SI 3・5は、古墳時代前期に帰属する遺構であり、SI 3の出土遺物の年代観は天神川編年のⅡ期、SI 5はⅢ期に比定できる。SI 3は建て替えの痕跡は認められないものの、床面施設の構造は2段階の変遷があることを確認した。古段階における中央ピット(P 1)は、新段階において、埋め戻され、床面として成形されている。P 1が埋め戻された床面中央部付近には、被熱により床面が赤色化した痕跡、あるいは硬化した範囲が認められた。またそれらの被熱痕跡と接して、被熱した台石が出土した。これらの状況から判断し、火気を扱う何らかの作業に台石を使用していたものと考えられるが、作業内容を特定するような痕跡や遺物は確認していない。しかしながら、遺跡内における鉄器の普及状態を鑑みると、小規模な鍛冶が行われていた可能性は考えられよう。

なお、SI 3の床面及び遺構周辺において、柱穴は検出していない。床面直上から炭化材が出土しており、上屋を構成する部材である可能性がある。出土した炭化材を放射性炭素年代測定した結果、暦年較正年代がAD255～391年(2σ暦年代範囲)の値が得られ、出土遺物の年代観とも矛盾しない。

SI 5は、床面の検出状況から主柱が2本の建物と判断した。④層を中心に遺物が密に出土し、土器、石器、鉄器が出土している。少なくとも、④層出土遺物は、遺構埋没過程に生じた凹地に廃棄されたものと想定している。SI 5は、全体の1/2程度の調査にもかかわらず、鉄器が7点も出土しており、当該期に鉄器がかなり普及していた様子がみてとれる。最下層(⑥層)出土のF 5～8は、ほぼ同位置より出土し、一見、集積されたような出土状況のありかたを示すことから、住居廃絶に伴う儀礼が行われた可能性も指摘しておきたい。

なお、本遺跡において実施した確認調査において、古墳時代前期に帰属するとみられる竪穴住居跡

第3章 倉谷荒田遺跡の調査

2棟(SI1・2)を検出した(2)。SI1・2を含め、未調査地に古墳時代前期の遺構が存在する可能性は高い。古墳時代前期の周辺状況としては、約0.9km東に位置する豊成上金井谷峰遺跡において、テラス状の遺構のほか土坑を確認した(3)。

遺物は、遺構内を中心に出土し、IV層などからも出土している。IV層出土の鉢25は、古墳時代後期に帰属するものと考えており、現状では25の年代観がIV層堆積時期の下限を示すものである。

近世以降

製炭土坑1基(SK6)、土坑1基(SK7)をI層(表土)下、IV層上面で検出した。いずれも埋土が近似した色調をなし、焼土ブロックを多く含む。SK6出土の炭化材を放射性炭素年代測定した結果、近世以降に帰属する遺構であることが示された。

SK7は、SK6と同一検出面の遺構であること、埋土の色調が近似していることから判断し、SK6の年代観に比較的近い時期の遺構である可能性が考えられる。炭焼きの場として土地利用されていたことも想定できよう。

以上、調査成果を概観してきた。本調査では、弥生時代中期後葉に集落内に鉄器が導入開始され、古墳時代前期には、鉄器の普及が進んでいたことを確認した。弥生時代後期から古墳時代には、鑄造鉄斧を入手できる環境下にあったことも判明し、集落内における鉄器の普及状況を追える貴重な例となった。また、柱穴が存在しない竪穴住居跡の存在も、竪穴建物の構造を考える上では、興味深い資料となった。

- (1)『倉谷西中田遺跡』2011 鳥取県埋蔵文化財センター
- (2)『小竹下宮尾遺跡 西坪岩屋谷遺跡』2010 鳥取県埋蔵文化財センター
- (3)『豊成上神原遺跡 豊成上金井谷峰遺跡』2011 鳥取県埋蔵文化財センター

【参考文献】

- 1『青谷上寺地遺跡3』2001 鳥取県教育文化財団
- 2『青谷上寺地遺跡4』2001 鳥取県教育文化財団
- 3『東高江・西高江遺跡発掘調査報告』1981 大栄町教育委員会
- 4『笠見第3遺跡』2004 鳥取県教育文化財団
- 5『笠見第3遺跡Ⅱ』2007 鳥取県埋蔵文化財センター
- 6『梅田萱峯遺跡1』2007 鳥取県埋蔵文化財センター
- 7『梅田萱峯遺跡Ⅱ』2007 鳥取県埋蔵文化財センター
- 8『梅田萱峯遺跡Ⅳ』2007 鳥取県埋蔵文化財センター
- 9『梅田萱峯遺跡Ⅴ』2007 鳥取県埋蔵文化財センター
- 10『押平尾無遺跡』2004 鳥取県教育文化財団
- 11『茶畑第1遺跡』2004 鳥取県教育文化財団
- 12『押平弘法堂遺跡 押平天王屋敷遺跡 茶畑山道遺跡』2003 名和町教育委員会
- 13『茶畑六反田遺跡(0・5区)』2004 鳥取県教育文化財団
- 14『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書-第16・19次発掘調査-』2008 鳥取県教育委員会
- 15『橋本漆原山遺跡 橋本徳道遺跡』2003 鳥取県教育文化財団
- 16『越敷山遺跡群』1994 会見町教育委員会 岸本町教育委員会
- 17『久古第3遺跡 貝田原遺跡 林ヶ原遺跡発掘調査報告書』1984 鳥取県教育文化財団
- 18『真野ブヤ原遺跡発掘調査報告書』2002 岸本町教育委員会
- 19『長山馬籠遺跡』1989 溝口町教育委員会

第4章 松河原上奥田第3遺跡の調査

第1節 基本層序

当遺跡は、大規模な圃場整備によりハードローム層まで削平され、遺構検出面で重機掘削痕が遺存するほど大きく掘削を受けていた。現地表面は、周辺を掘削した土壌による厚さ0.30～1.30mの造成土によって、ほぼ平坦に整形されている。

当遺跡は、平成20年の大山町教育委員会による試掘確認調査によって落とし穴が確認されたため、本調査の対象となったものである。

この遺構の検出面は、ハードローム層であったが、本来はかなり高い位置から掘り込まれたものと推察される。

第2節 落とし穴の調査

SK1 (第38図、PL24)

丘陵東側の傾斜変換点付近の、標高69.70～70.50m付近の緩やかに東側に傾斜する斜面地に立地する。調査地から東側は、急激な斜面部となっている。

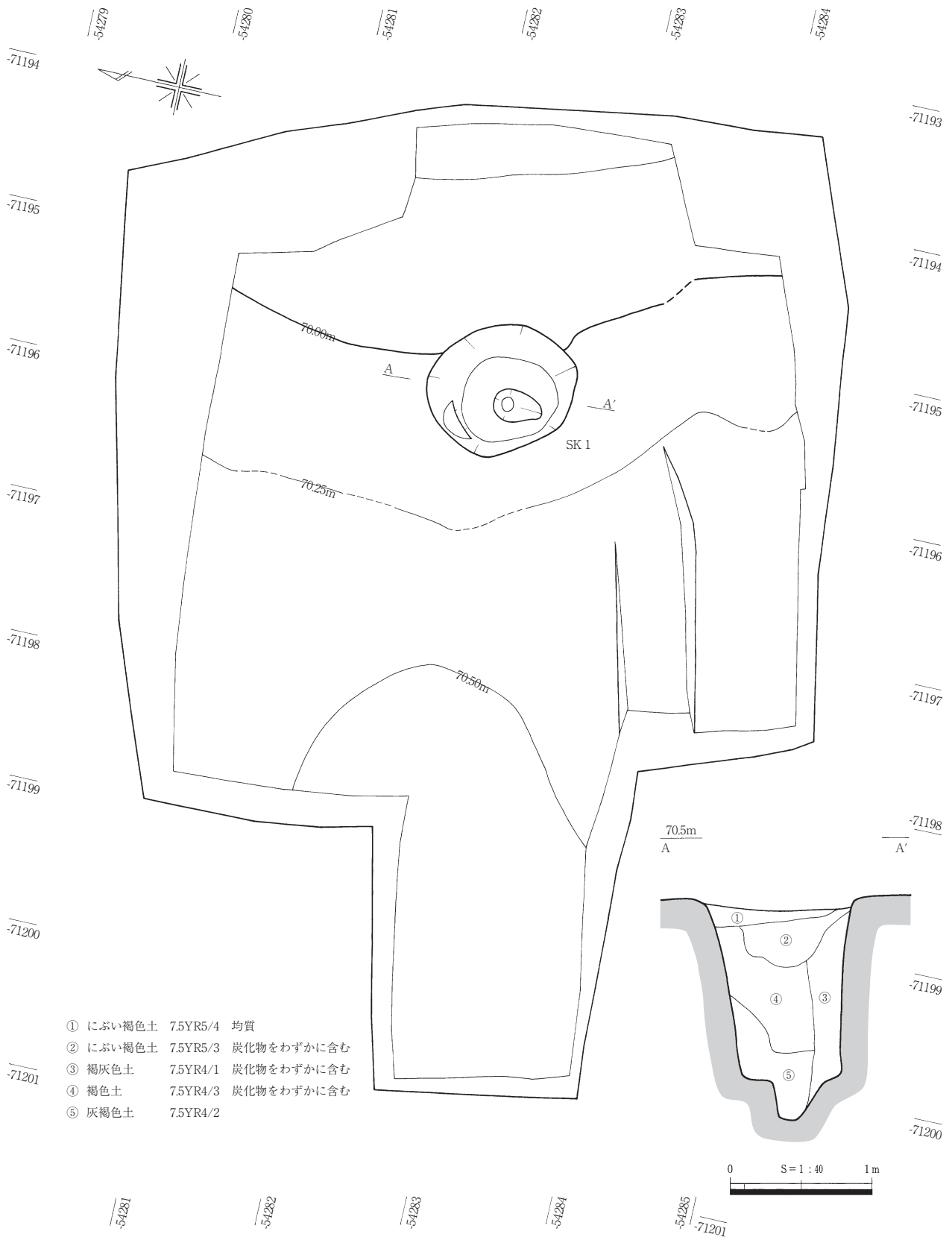
平面は、上縁部、底部とも楕円形を呈す。規模は、上縁部で長軸1.05m、短軸0.91m、深さ最大1.24mを測る。底面は、長軸0.66m、短軸0.60mを測り、中央やや南寄りに、長軸35cm、短軸22cm、深さ26cmのピットが掘り込まれており、逆杭が立っていたものと考えられる。

埋土は5層に分層できた。いずれも褐色土系の埋土で、通常の落とし穴の埋土となる、黒褐色土系の埋土とは異なっている。第2から第4層には、炭化物をわずかに含んでいる。底面ピット内の埋土は、明瞭に分層することはできなかった。

出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、形態的な特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



写真3 SK1 調査風景(北西から)



第38図 松河原上奥田第3遺跡調査地平面図及びSK 1

An aerial photograph of a rural landscape. In the foreground, there is a large, dense forest of tall, thin trees, possibly cypresses, arranged in a grid-like pattern. A dirt road or path winds through the forest. In the middle ground, there is a small settlement or farmstead with several buildings, including a long, low structure that could be a barn or a warehouse. There are also some vehicles and what appears to be a construction site or a cleared area. The background shows a valley with more trees and a few scattered buildings, leading up to a range of hills or mountains in the distance. The overall scene is a mix of natural forest and human-made structures.

PLATE